

# TMK ミライデザインプロジェクト

玉城町 令和6年度 第7号

玉城町明るい未来づくりに関する調査研究業務報告書



皇學館大学教育開発センター 准教授 池山敦

令和7年3月



はじめに

毎年、この報告書の「はじめに」を書くときに、過去数年を振り返ることが通例になっている。令和2年、3年とコロナウイルスについて、そして昨年はロシア・ウクライナ情勢について書いていたようだ。一年前の、自身の思考を振り返ることは、これまで報告者に時間を旅する装置に乗るような感情を呼び起こさせてきた。

世界情勢が「不安定な状態に安定している」と書いた令和4年には、一方で変わらないものもあるとして、「地域社会を支える地縁に基づくシステムは、変わることを拒否するかのように前例を踏襲し続ける」と一年前に書いている。その、住民の暮らしを「よいもの」にするための努力を継続する必要がある、ということ述べた。

今年一年の本研究を通して、今一度思いを新たにすることがある。それは、円環を閉じるように、報告者自身の原初的な研究テーマに戻るものであった。「自己決定を支援する」というテーマを本研究のスタート時に掲げ、やはり様々なことを調査し、実践してきた中で今一度この部分が根幹であり、中心であると確信している。

「決める」ためには、「知り」、「考え」なければならない。住民はいかに自分たちの取り巻く状況を知るのか。そして、衆愚にならぬように、考えることができるのか。化学の世界には自らを変質させることなく、反応を促進する「触媒」という概念がある。支援者、研究者はいかに地域住民の自己決定における「触媒」となりえるのか。そんなことを考える。

(令和5年報告書「はじめに」より)

毎年、この報告書の「はじめに」を書くときに、過去数年を振り返ることが通例になっている。昨年度の報告書には上記のように報告者は書いていた。

今世界を見てみよう。未曾有のパンデミックを乗り越え、私達は次のフェーズに入った。しかし、ウクライナではあいも変わらず人が亡くなり、ガザの停戦も危ういバランスの上にかろうじて（これを書いている時点では）成り立っているにすぎない。

以前報告者は「世界情勢が不安定な状態に安定している」とここに書いたのであるが、そのことは今も変わらない。物価がとめどなく上昇し、白菜の価格が今年の3倍であるという。ガソリンは、近隣でも1リットル170円を越え、これまで103万円の壁といわれた所得税の課税標準額の見直しが今、まさに国会にて変更されようとしている。

以前に、一方で変わらないものとして、「地縁に基づくシステムは、変わることを拒否するかのように前例を踏襲し続ける」と書いた。しかし、変わることを拒否しても、外界と接点を持つ開放システムである地縁社会は否が応でも変わることを強要される。おそらく、昨年の出生者数の日本人のみはついに70万人を下回るほどの少子化であるし、総死亡は約160万人となり、年間に約90万人程度の人口減少が進んでいる。

しかし、恐れることはない。玉城町ではここ数年で、これまでなかったほど地域活動の萌

芽が見られる。NPO 法人が新たに設立され、地域支援マネージャー（集落支援員）が任命されている。マネージャーの取組を今年度は少しでも後押ししたいと微力ながら努力した。

本年も本研究を終えることができたことを、関係者の皆様に深く感謝申し上げます。  
ありがとうございました。感謝とともに以下に報告を行います。

令和7年3月  
皇學館大学教育開発センター  
准教授 池山敦

(1) プロジェクトの背景

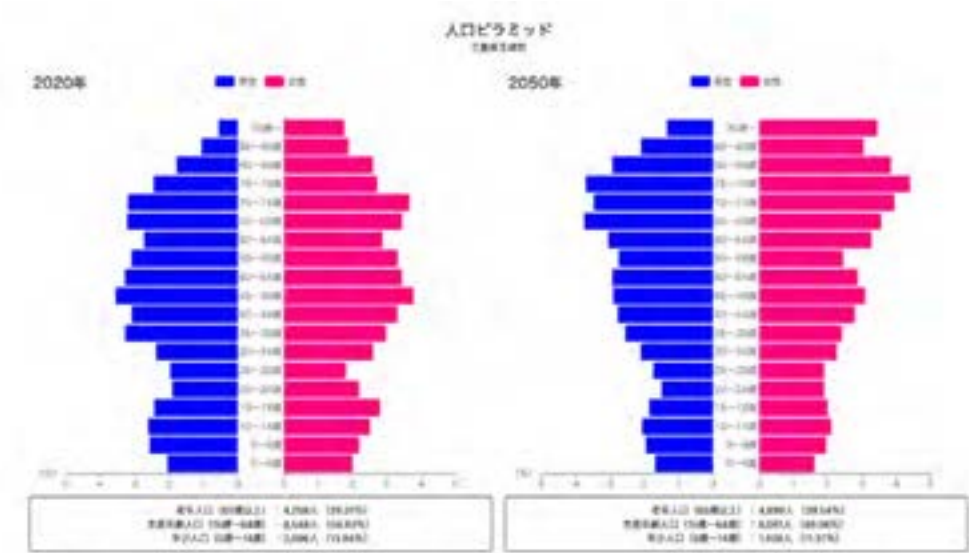


図 1 玉城町人口ピラミッド (RESAS より)

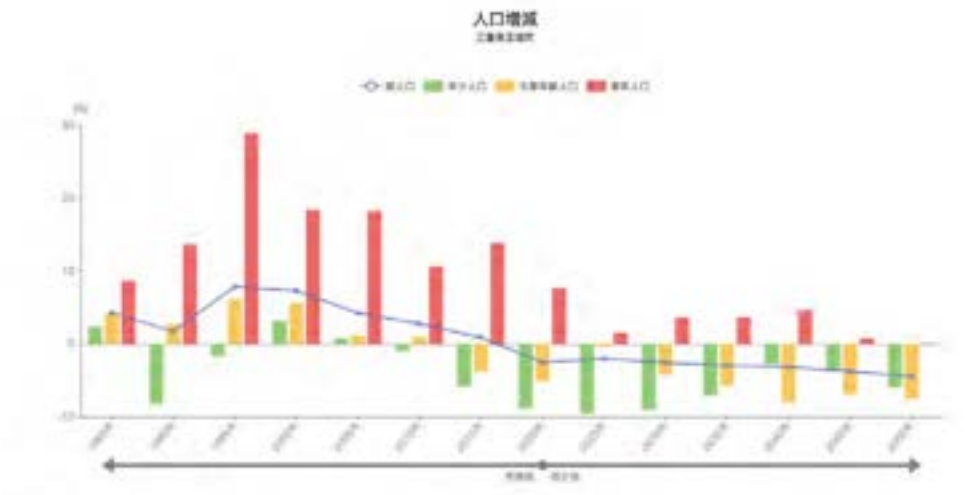


図 2 玉城町における年代別人口増減 (RESAS より)

玉城町は「神宮の鎮座とともに、神領となり、その中心でした。倭姫命（やまとひめのみこと）に随行して皇大神宮（こうたいじんぐう）の祢宜（ねぎ）となった荒木田氏によって開拓された農業のまち」<sup>1</sup>である。その後北畠氏により田丸城が築かれ、織田信雄の領有などを経て、その後紀州領となり、廃藩置県後に度会県、三重県の管轄となった。その後、明治の大合併において、田丸町、東外城田村、有田村、下外城田村となり、その後昭和の大合併において、現在の玉城町となった。現在は人口が2020年現在15,041人で、平成では合併を行わず、単独の町として現在に至っている。

人口構成については、図1のとおりであるが、高齢化率が28.31%（全国28.8%）、年少人口比率が13.94%（全国11.6%、ただし2022年）となっている、高齢化率に関しては全国並み、近隣と比較すれば低いほうであり、年少人口比率は全国平均よりも高いので、比較的若い町であるといえる。また、総人口に関しては2020年（令和2年）の国勢調査により公式に減少フェーズに入ったと考えられている<sup>2</sup>。図2では、玉城町における年齢別の人口増減を示しているが、高齢者の数も増減としては安定期に入ったと考えられる。しかし、年少人口、生産年齢人口はともに減少が今後続き、やがて2045年頃から自然増減としては「全減時代」となることが予想されている。

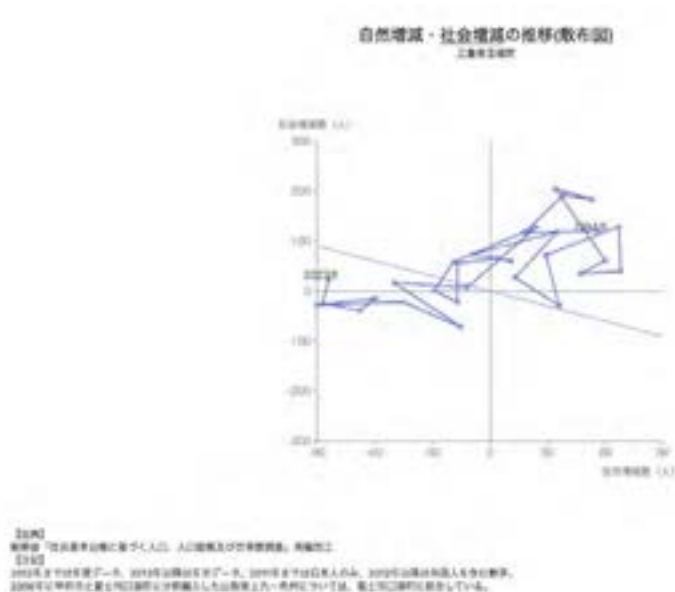


図 3 玉城町における自然増減・社会増減の推移（RESAS より）

<sup>1</sup> 玉城町公式 WEB <https://kizuna.town.tamaki.mie.jp/chosei/shokai/sugata.html>

<sup>2</sup> 全国データについては国立社会保障人口問題研究所による。

一方で、社会増減としては図3を参照されたい。こちらでは縦軸に社会増減を横軸に自然増減を取ったものであり、それぞれ中心より下、左の方向が「減」となる。自然増減のそれぞれをプロットすることにより、それぞれの象限において「社会増・自然増」「社会増・自然減」「社会減・自然増」「社会減・自然減」の4つの状況に区分して分析が可能となっている。玉城町は分析可能な1994年から2010年頃までは第1象限、つまり「社会増・自然増」にいたが、その後左に（つまり自然減の方向に）シフトし、最新データの2023年では24人の社会増、84人の自然減となっていることがわかる<sup>3</sup>。

このことは何を意味するか。社会増、つまり転入が転出を上回る状況が玉城町ではここ近年では少ないものの、若干見られる。例えば上記の通り2023年では社会増減としてはプラスであったが、内訳は転出427人に対して、転入が451人であった。このことからわかるように、玉城町においては一定数の人口の流入（転居等）が見られる。

次ページの図4及び5は航空写真による比較であるが、玉城町内では比較的低廉な地価と近隣市街地（伊勢市、松阪市等）へのアクセスも良好なことから、ここ数十年で多くの中小規模の住宅開発が行われてきた。図中に赤い丸で囲んだ地区が後に「こどもまち歩きワークショップ」の項において詳しく述べる下田辺地区である。写真を見比べてみると丘陵地帯であった部分を切り開いて多くの住宅が増加したことがわかる。

---

<sup>3</sup> RESAS ではカーソルを合わせることでそれぞれの年度の数値を見ることができる。  
<https://www.resas.go.jp/population-sum/?pref=24&city=24461&tab=1&year=2020&level=city&lat=34.4902784&lng=136.6309176&zoom=10&opacity=0.8>



図 4 上 1979～1983 年、下 2020 年（地理院地図より）



玉城町において一定数の転入があることは、自然減によって減少する人口を補填してくれるリソースであると同時に、新たな問題も生んでいる。それは、新来の住民が既存の地域コミュニティにどのようにして合流することができるか、という問題である。上記のように行われてきた住宅開発に関して、既存自治区<sup>4</sup>に合流した地域もあるが、財産区やこれまでのしきたりなどの関係で既存自治区から合流を拒否された地域も見られる。そのような地域において改めて自治区を作る、という動きを見せた地域も認められるが、一定数はそのまま地縁的な団体を作らずに生活をしている。

玉城町において令和3年11月～令和4年1月に行われた「玉城町地域の未来を考える住民アンケート調査」<sup>5</sup>によると、「問10 あなた自身、または、あなたの家族は、自治区に入っていますか。(○は1つ)」という問いに対して、有効投票5255票のうち、7.7%が「入っていない」と回答。その中で、29.7%が「入る必要を感じない」と回答している。しかし、8.4%は「入り方がわからない」と、また10.8%が「既存の自治区には入れてもらえなかった」と回答したことは特筆すべきであろう。このように、新規住民の転入は玉城町にとって福音であるとともに、ある意味課題の種であるともいえるのである。

このことは、後に述べる地域支援マネージャーとの「地域コミュニティ支援担当者会議」においても何度も話題になってきた。昨年の報告書でも触れた通り、近隣自治体からは「贅沢な悩み」と言われる部分ではあるが、悩みであることは間違いない。

---

<sup>4</sup> 玉城町では自治会、町内会などの区域に「自治区」を設置している地域がほとんどである。

<sup>5</sup> <https://kizuna.town.tamaki.mie.jp/news/documents/houkokusyo.pdf>

【問 10 で「2. 入っていない」と回答された方のみ】  
 問 10-1 自治区に入っていない理由は何ですか。(あてはまるもの全てに○)  
 ○自治区に「加入していない」と回答した 7.7%、404 人の方に加入していない理由を尋ねた。  
 ○「自治区に入る必要性を感じないから」が最も高い。また、「人間関係が煩わしい」「活動をしたくない」「会費を払いたくない」という意見もそれぞれ 10%弱となっている。  
 ○また、「既存の自治区には入れてもらえなかった」「入り方がわからない」という意見もそれぞれ 10%前後ある。

図 5 小学校区別「自治区へ加入していない理由」

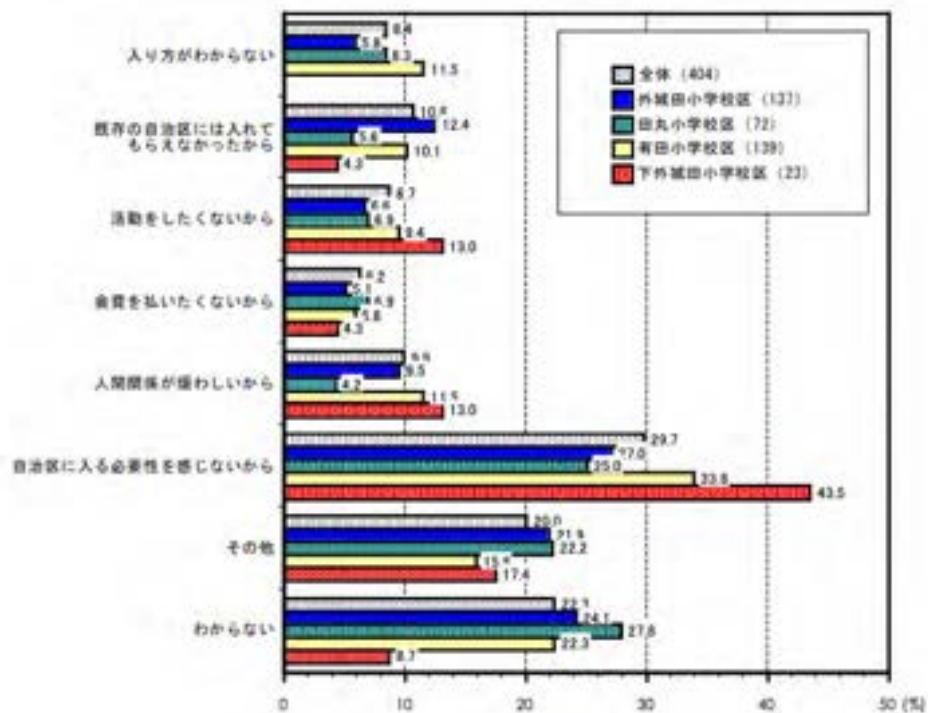


図 5 自治区に加入しない理由（玉城町地域の未来を考える住民アンケート調査・小中学生アンケート調査結果報告書より）

そこで本事業においては、仕様書に従い次のような内容を展開した。①新来の住民も多い地区である下田辺地区における子どもまち歩きの実施、②玉城町において今年度より委嘱された地域支援マネージャー（集落支援員）の任務のバックアップ及び事業の進捗を管理する「コミュニティ支援担当者会議」の開催、加えて町内で開催される住民による地域別懇談会における専門的知識の提供、③外部有識者を迎えて玉城町における地域コミュニティに関する課題について議論を行う「玉城町地域コミュニティのあり方研究会」の開催、最後に④今後の地域コミュニティ課題を見える化するために UAV（ドローン）の可能性を探る、以上 4 つである。この後概観する。

## (2) こどもまち歩きについて

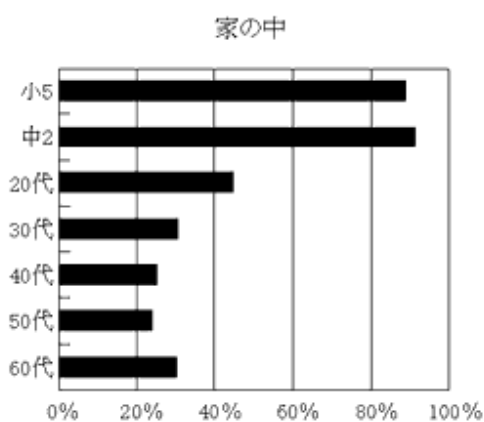


図6 外で遊ばなくなった子ども  
(環境省 WEB より)

力の低下という変化を及ぼすことももちろんであるが、それに加えて自分の生まれ育った地域についての知識を得ることができない、ともいえるだろう。

報告者は子供の頃釣り竿を持って、あるいは捕虫網を持って野山を駆け回ったものであるが、その事により生き物に触れるとともに、自分の暮らす地域の自然や地形に親しみ、多くのことを覚えてきたと感じている。そのことは、やはり自身にとってある意味での「郷土愛」につながった体感がある。このことが現代の子どもに抜け落ちているならば、それは進学などで町を離れた後で、もう一度戻って来るといふ、いわゆる U ターンというときのモチベーションを欠いてしまうのではないかと考える。

そこで、本事業では子どもたちが自分の暮らす地域を見る解像度を上げるという目的で子どもと大人が、足で歩ける範囲を改めて歩き、様々なものを見、対話するとい



図7 昨年の様子

開催の詳細については、巻末の記録を参照いただきたいが、こちらには本企画の意図やねらいなどについて述べる。

若干古いものになるが環境省の調査<sup>6</sup>によると、現代の子どもは昔の子どもに比べて家の中で遊ぶことが多いという。50代である報告者の子供の頃に比べれば、ゲーム機やインターネットに接続されたテレビで見る動画サイトなど、室内に魅力的なコンテンツが溢れていることは間違いない。このことは、子どもにとって運動能力や基礎体

力の低下という変化を及ぼすことももちろんであるが、それに加えて自分の生まれ育った地域についての知識を得ることができない、ともいえるだろう。

報告者は子供の頃釣り竿を持って、あるいは捕虫網を持って野山を駆け回ったものであるが、その事により生き物に触れるとともに、自分の暮らす地域の自然や地形に親しみ、多くのことを覚えてきたと感じている。そのことは、やはり自身にとってある意味での「郷土愛」につながった体感がある。このことが現代の子どもに抜け落ちているならば、それは進学などで町を離れた後で、もう一度戻って来るといふ、いわゆる U ターンというときのモチベーションを欠いてしまうのではないかと考える。

そこで、本事業では子どもたちが自分の暮らす地域を見る解像度を上げるという目的で子どもと大人が、足で歩ける範囲を改めて歩き、様々なものを見、対話するとい

う「子どもまち歩き」を行ってきた。

図7に昨年度のまち歩き前の子供達の話し合いの写真を示しているが、昨年度はテーマを「地域の面白いところ」として、子どもたちに地域の魅力を再発見することを促した。

今年度は反対に子どもたちに自分たちの知っている地域の危険箇所をリストアップするように促した。その意図は自分たちの暮らす地域の防災や防犯などの危

<sup>6</sup> 平成7年環境白書より <https://www.env.go.jp/policy/hakusyo/h08/9992.html>

危険箇所を探し、そこを巡ることによってそこで安全に暮らすことを考えてもらうためである。



図 8 アプリの「ロゲミン」

今年度もまち歩きには鳥羽商船高等専門学校学生作成のアプリ「ロゲミン」を使用した。その際のルールは次のようなものである（下記囲み内）。

このまち歩きのポイントは以下のようなところである。①子どもたちは、自分たちの作ったマップでなく、他者の作ったマップを元に歩くことで、自分たちが元々気がついていなかった危険箇所に気がつくことができること。②歩き終わった後で写真を元にして「ここはどこが危

険か」を振り返ることで、安全意識を高めることができる。③ポイントをつけることで、ゲーム形式で楽しみながら、地域安全（あるいは地域資源）について学ぶことができる。という点である。なお、本まち歩きワークショップには皇學館大学の CLL 活動である「TMK ミライデザインプロジェクト」の学生及び、鳥羽商船高等専門学校のアプリ開発チームの学生が参加しチューターを務めた。

当日はまち歩きの後、子どもたちは今日の思い出を思い思いに絵に書き、それを缶バッジにして記念品として持ち帰った。



図 9 記念写真



図 10 歩き終わって地図で答えあわせをしているところ

ゲームルール<sup>7</sup>

時間 1時間20分想定

範囲 半径500メートルの円内

8か所のポイントを設定し、地図交換後にそのうちの5か所のポイントを回る。

- (1) 初めに班に分かれて自分たちが知っている危険な場所（災害、交通安全、犯罪等）を8か所設定。
- (2) アプリを利用し、ポイントを示した地図を作成。その地図を他の班と交換した後、8か所のポイントから自分たちが行く5か所のポイントと全体のルートを相談して決める。
- (3) 班ごとに大人と一緒に5か所を歩いて回る（現場で写真を撮る）。
- (4) ポイントにはランダムに得点が振られているので、到着後に自分たちが回ったポイントの得点を計算し勝敗を決める。
- (5) 現場で撮影した写真を元に、大人と一緒に「ここは何が危ないか？」を振り返り話し合う。

---

<sup>7</sup> 当日の実施用資料を編集して掲載

(3) コミュニティ支援担当者会議、専門的知識の提供

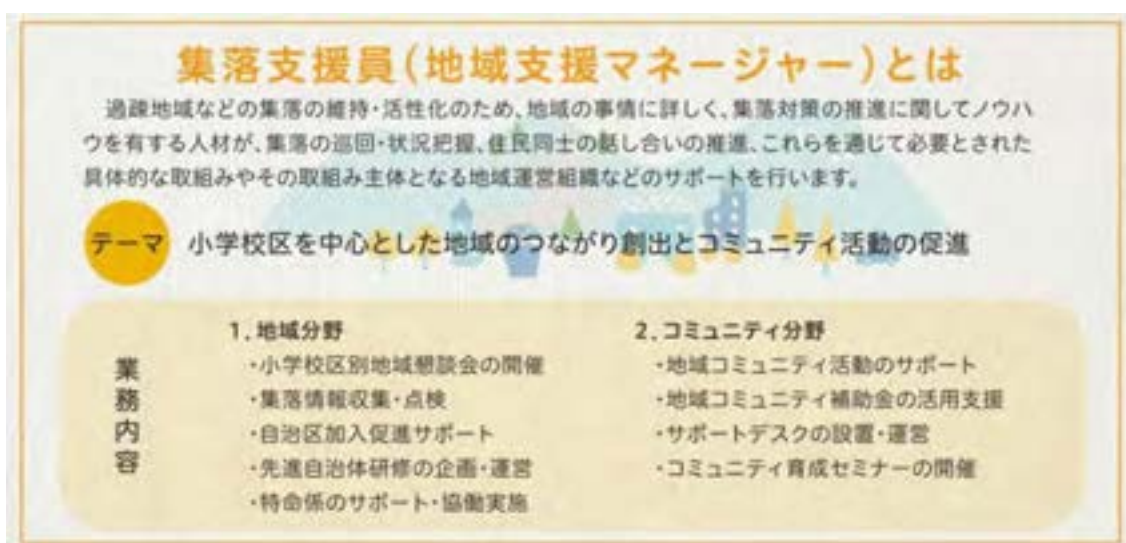


図 11 集落支援員（地域支援マネージャー）とは  
（広報たまき令和6年8月号より）

- ① 今年度から玉城町では新たに集落支援員1名の委嘱を行った。委嘱した集落支援員の職名は「地域支援マネージャー」で、その概要は図11のとおりである。業務内容は次のとおりである。1.地域分野：／小学校区別地域懇談会の開催／集落情報収集・点検／自治区加入促進サポート／先進自治体研修の企画・運営／特命係のサポート・協働実施。2.コミュニティ分野：地域コミュニティ活動のサポート／地域コミュニティ補助金の活用支援／サポートデスクの設置・運営／コミュニティ育成セミナーの開催、である。

業務は多岐にわたっており、各方面との連携が欠かせない。そして、この業務を一人で担うため、進捗管理やバックアップの体制が望まれた。そこで、本事業では就任後、月に1度「コミュニティ支援担当者会議」を開催し、担当職員、地域支援マネージャーと報告者で事業の進捗の確認や、進め方の検討を行ってきた。会議の中では多くの議論が行われたが、次の3点について特に述べる。

A) 地域コミュニティの活性化と自治区支援

会議では上記の9つの業務内容について議論が行われたが、その中でも最も優先度が高いのは、この項目であった。玉城町には上述の通り、自治区が存在しており、他自治体と同様に、加入率の低下、役員の高齢化、担い手不足などの課題が山積している。その中において、地域支援マネージャーは自治区への加入促進や、情報収集、課題解決に向けた話し合いの支援などが議題となった。地域支援マネージャーは業務の一つとしての地域コミュニティに関する相談窓口「地域コミュニティサポー

トデスク」を定期的に開設しており、そこに寄せられた相談や、マネージャーが出席した地域の役員会などでの情報が共有され、議論が行われた。また、地域支援マネージャーは地域包括ケアシステム担当で実施されている「地域ケア会議」にも出席しており、そちらでの情報共有や、協力の要請などが議論された。

## B) 70周年記念事業の推進と住民主体のイベント企画

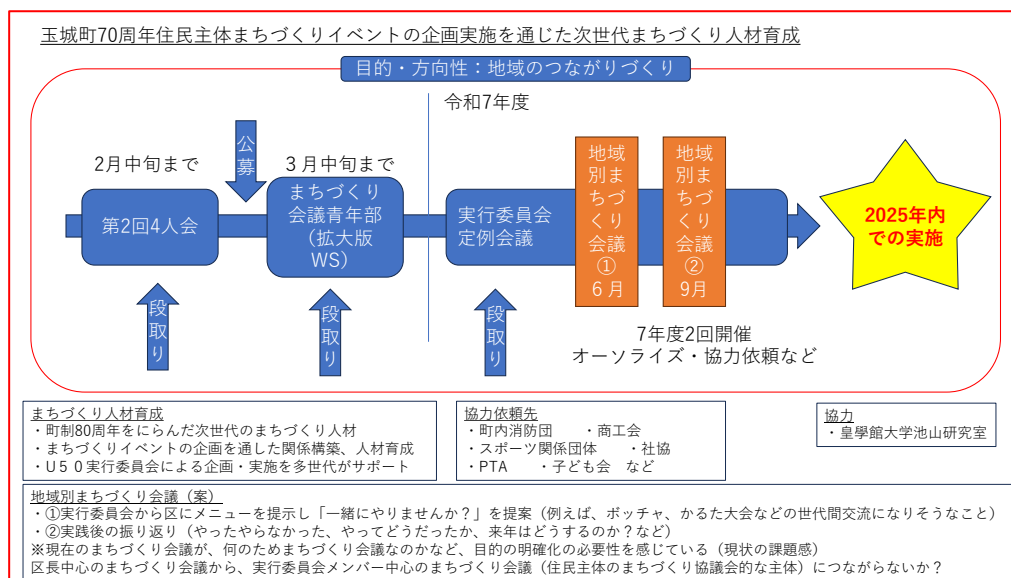


図 12 町民主催 70周年行事の実施体制案  
(コミュニティ支援担当者会議資料より、未定稿)

玉城町では、昭和の合併による現在の町制から令和7年で70周年となるため、各種の記念行事が企画される予定である。このことを契機に地域コミュニティの住民が積極的にまちづくりに参加できるように、町民企画の行事を実施することを促すことが検討された。玉城町では、この町制70周年を起爆剤としてまちづくりを活性化するため、これまであった補助金の見直しや、冠事業の創出等、町民が主体となる記念事業を支援する体制づくりが検討された(図12)。

表1 地域コミュニティ支援担当者会議

回数	開催日
第1回	令和6年7月22日
第2回	令和6年8月19日
第3回	令和6年9月19日
第4回	令和6年10月22日
第5回	令和6年11月27日
第6回	令和6年12月19日
第7回	令和7年1月20日
第8回	令和7年2月27日

C) 効果的な情報発信とコミュニティ人材の育成

会議では、地域の情報発信の強化についても時間を多くの割いて議論が行われた。玉城町公式 LINE の活用や地域支援マネージャーのインスタグラムの運用などが企画され、実施された。デジタルに加えて同時に、アナログな情報共有についても検討され、田丸駅の掲示板を活用する方法が発案され、実施された。

また支援マネージャー主催のセミナーも複数回開催され、ファシリテーションやコミュニケーション、カメラの撮影技術などをテーマとしたものが開催された。

会議は表1の通り実施された。また、会議に先立ち報告者と地域支援マネージャーの間での打ち合わせが毎回開催された。

② 地域別懇談会における専門的知識の提供

表2 玉城町地域別懇談会

開催日	地区
令和6年9月24日	田丸地区
令和6年9月25日	下外城田地区
令和6年9月26日	外城田地区
令和6年10月4日	有田地区

本事業では、玉城町により主催され、地域住民が集い地域課題等について対話を行う「地域別懇談会」において、専門的知識を提供した。地域別懇談会は表2の通り実施された。

地域別懇談会は「地域まちづくり会議」と銘打ち、玉城町に4箇所ある、小学校区ごとに基本的には同じプログラムにより実施された。全体テーマを「玉城町誕生100周年に向けて

『70周年の今、地元でできること・みんなで一緒にできること』としたうえで、住民による対話が行われた。報告者は冒頭と最後に講評を述べさせていただいた。

対話では「えんたくん」といわれる円形の段ボールを用い、和気あいあいとした雰囲気のもとに実施された。まず、対話の中では「地域の暮らしに対する満足度は百分率でいうとどれくらい？」という問い掛けから始まった。各地域で若干数字は異なったものの、概ね75



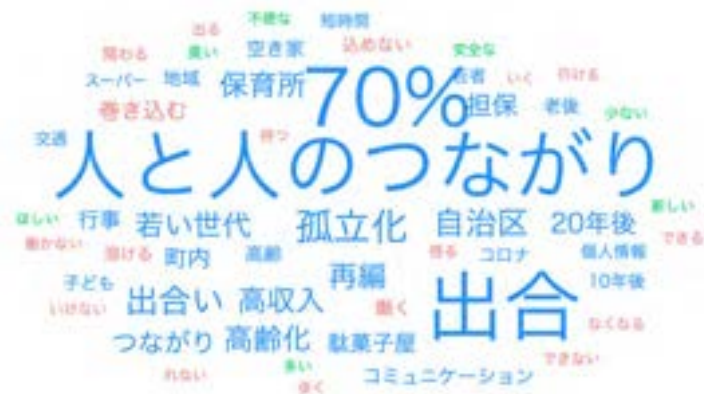


図 13 玉城町における地域の課題

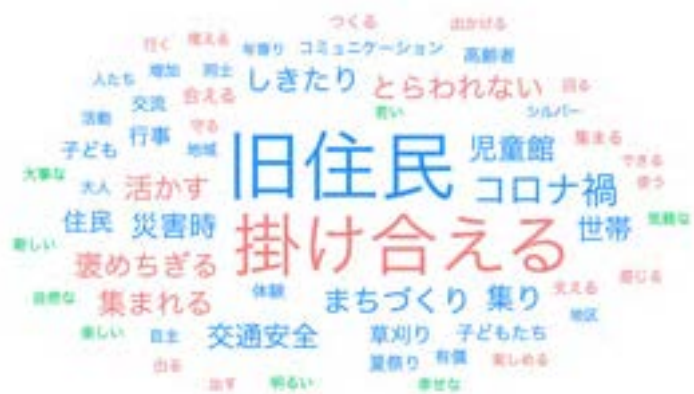


図 14 70周年で取り組むと良いと思う活動



図 15 地域まちづくり会議

～80%程度の満足度を住民は得ているようであった。現在暮らしている地域の課題については、図 13<sup>8</sup>のような意見が出された。

「人と人のつながり」や「孤立化」といったものや、「出合」「若い世代」といった、地域の課題が多く出されたことがわかる。

また、次の設問では「70周年で地域においてどういったことに取り組むと良いと思うか」というものに対してでた回答が図 14 である。傾向といったものを見出すのは難しいが、現場にいたものとしては、旧住民と新住民、あるいは多世代での交流を求めるもの、人が定着できるまちづくり、といったものに賛意が集まっていたと感じた。

前述の通り、報告者は講評をさせていただいたが、次の2点について述べさせていただいた。①こういった地域の人が集まり「話し合うこと」がとても大切であること。②こういった話し合いから「話したことがある」「あの人を知っている」「信用できる人だ」と思えることは「社会関係資本」といわれ、地域を暮らしよくするための「資本」であること。会

<sup>8</sup> 画像の作成にはオンラインのテキストマイニングツールである「ユーザーローカル AI テキストマイニング」を使用した。https://textmining.userlocal.jp/

場に出た意見により当然詳細は異なるものの、以上 2 点については必ず触れて講評とさせてください。

(4) 玉城町地域コミュニティのあり方研究会

表3 玉城町コミュニティのあり方研究会 委員

委員 (50 音順)	所属・専門等
浅見雅之氏	合同会社人まち住まい研究所代表社員・ NPO 法人神戸まちづくり研究所事務局長 (まちづくり支援、災害復興支援・防災)
池山敦	座長・皇學館大学教育開発センター准教授 (コミュニティ政策、ファシリテーション)
石丸隆彦氏	特定非営利活動法人 M ブリッジ・まちづ くりコーディネーター (地域支援・課題解 決)
伊藤純子氏	静岡県立大学助教 (保健指導、公衆衛生)
名取良樹氏	玉城町地域おこし企業人・面白法人カヤッ ク ディレクター (移住マッチングサービ ス等企画運営等)
橋本大樹氏	一般社団法人東北まちラボ代表 (災害被災 コミュニティ支援、集落支援)

昨年度に引き続き外部有識者を招聘しての研究会を3度開催した。研究会では、様々な論点について議論が行われたが、次の4つの点について、その概要を述べるに留める。詳細は巻末の議事録を参照されたい。

A) 地域コミュニティの現状と課題

玉城町における地域コミュニティに現状と課題について共有された。上記の通り、比較的人口が保たれ、若く、流入人口が一定程度ある玉城町であるが、旧来の住民と新来の住民との融合に難があることが共有さ

れた。自治区についても、住民は必ずしも入りたくないわけでもなく、ただ、旧来の農村集落の地縁組織としての自治区には抵抗があることがこれまでの調査で仮説として浮かんで来ていることが共有された。地域と行政との関係については、すべての地区<sup>9</sup>と平等に関わることも重要であるが、現状何かをやりたいという熱意のある地区を集中的に支援し、その状況を他の自治区に共有することで、波及効果を狙う方法もあることが議論された。令和7年においては、前述の通り町制70周年を迎えることから、その記念行事の報告会などを催すことで、情報の還流を目指すことなどが議論された。

B) 集落支援員の役割と活動

前述の通り、今年度から委嘱された地域支援マネージャーの活動についても議論された。集落対策の推進に対してノウハウを有する人材としての登用であり、具体的には前述の通り、集落の巡回、状況把握、住民同士の話し合いの促進などを行う。その中のテーマの一つとして、玉城町には4小学校区がありそれぞれ、昭和の合併

<sup>9</sup> 玉城町には69自治区が存在する。

表4 地域コミュニティのあり方に関する  
研究会

回数	開催日
第1回	令和6年8月15日
第2回	令和6年10月21日
第3回	令和7年2月7日

前の町村となるため、その単位を一つのブロックとして支援を行うことが話し合われた。

反面、マネージャーは1名であるので、全部の地区をサポートするには限界があるため、優先順位をつけたりして、効果的に支援する方策についても議論が行われた。マネージャーの姿勢としては、地域と地域の媒介役であること、

地域同士の情報の交換を促進する、地域に寄り添い話を聞く存在であること、などが必要と話し合われた。

C) 70周年記念事業を通じた地域活性化

上記の支援担当者会議でも議論を行っていたこの点であるが、研究会でも活発な議論が行われた。ここでも、地域支援マネージャーが触媒となり、大小様々なイベントを令和7年中に実施することが検討された。イベントを通して、新来と旧来の住民の融合を図り、地域力を高めることが期待され、住民の「役場頼み」という意識を改革するため、行政と役場の分担を改めて再定義し、住民の自主性を引き出す契機とすることが議論された。

D) まちづくり交付金の改定と活用

70周年を契機に、これまで運用されていた「まちづくり交付金」について、見直しを図ることが提案され、議論された。改正案では「地域活性化型」と「集落活性化型」の2種類の補助金が用意され、住民自治組織や町内団体などが活用できる方向で検討された。重要なこととして、交付金の理念を町民と共有すること、効果的な活用を促すための丁寧な説明が必要で、説明会に参加できない人のために、動画による説明などが提案された。また、既存の補助金についても手続きの簡素化や報告会の実施などを通して、より効果的に運用できるような方法について活発な議論が行われた。特に、報告会で優良事例を共有し、町内におけるまちづくり活動の啓発を行うことが提案された。

会議は、表2の通り今年度は3回実施された。

(5) 地域コミュニティの課題を見える化する取組において、UAV（ドローン）の可能性検討



図 13 地理情報の投影

本事業ではこれまでも、地域住民にとって身近な地域課題をわかりやすく住民に示すことをコンセプトに様々な取組を行ってきた。例えば、地形模型を作成しそこに地理情報をプロジェクションマッピングすることにより、防災情報をわかりやすく伝える等の取組を行ってきた。わかりにくいことをわかりやすく伝えるためには、通常見えないものを「見える化」することは一つの手法であると考えられる。

今年度は、本事業において UAV（ドローン）を活用した地域情報の見える化に取り組んだ。年度当初は各としたテーマはなく、探索的に検討しながら取り組んできた。その中で今年度特に取り組んだのは「スクミリングガイ（通称ジャンボタニシ）<sup>10</sup>」の食害問題である。スクミリングガイは、現在は関東以南の各地で繁殖し、食害が問題となっている。

今年度は、本事業において UAV（ドローン）



図 13 スクミリングガイの卵（津市内、報告者撮影）

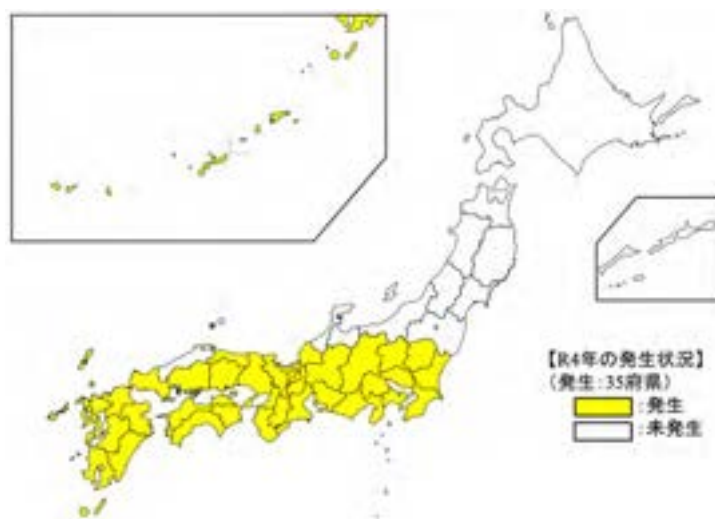


図 14 令和 4 年現在の生息範囲（農林水産省）

<sup>10</sup> 南米原産の湛水に生息する巻き貝の一種で、生育初期の稲やレンコン等を加害する。1981年、台湾から食用目的で輸入されたが、後に野生化した。関東以西で発生が確認されており、令和 4 年には 35 府県で発生を確認。（農林水産省：<https://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/gaicyu/siryou2/sukumi/attach/pdf/sukumi-2.pdf>）

図 14 の通り、三重県も生息圏とされているが、玉城町では近年目撃され、食害が報告されるようになってきている。このスクミリンゴガイであるが、撃退が非常に難しいとされている。

(1) 被害軽減の取組

- ジャンボタニシによる被害を軽減するためには、最も効果的な被害防止対策を組み合わせ、地域ぐるみで取り組むことが必要。
- 農林水産省では、以下により、地域ぐるみの取り組みを支援。

- 効果的な被害防止対策を検討するための全国協議会の設置  
→ 水稻病虫害の防除の徹底を図るため、各地域の発生状況や被害状況等を共有し、効果的な被害防止対策を検討  
令和2年10月に防除対策マニュアルを公表
- 新規発生地域等における被害防止対策の導入への重点的な支援  
→ 地域における被害要因等の分析、地域の実態に応じた最も効率的な被害防止対策の確立・普及
- 効果が高い被害防止対策の普及  
→ 地方自治体や生産者団体等と協力した技術講習会等の開催、HPやSNS等を活用した情報発信 など

19

図 15 被害軽減の取組（農林水産省）

図 15 に示す通り、被害軽減のためには、効果的な被害防止対策を組み合わせ地域ぐるみで取り組むことが必要とされている。対策には、薬剤散布や浅水管理などいくつかの方法があるが、どれを使ってもなかなか撲滅が難しいというのが現状であるという。

本事業では、スクミリンゴガイの卵が図 13 の通り鮮やかなピンク色であることに着目し、ドローンからの空撮によりこの卵を撮影し、それを画像処理し、位置情報を元に GIS（地理情報ソフト）上に落とし込み、スクミリンゴガイ生息マップを作成し、それをもとに効果的防除につなげることに取り組んだ。本プロジェクトには、鳥羽商船高等専門学校中井一文准教授の研究室の学生に協力を求めた。

スキームは次のとおりである。1) 疑いのある付近を高度 10m 程度でドローンにて撮影する。2) 撮影した画像の色情報を画像処理し、卵を抽出する。3) 探した卵をプログラムに数えさせる。4) 位置情報と卵の数を記録した SHP<sup>11</sup>ファイルを作成する。4) SHP ファイ

<sup>11</sup> GIS（地理情報ソフト）で読み込める形式の地物の情報を格納したファイルのこと。

ルを GIS ソフト<sup>12</sup>により表示しマップを作成する。というものである。

## 使用機材:DJI Mavic 3T



図 16 使用したドローン機材

## 5.SHPファイルの出力・GIS上で可視化

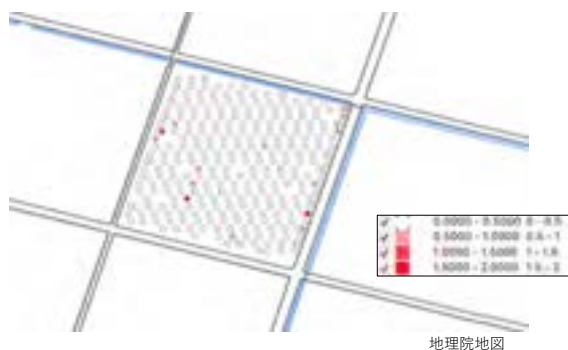


図 17GIS 上でマッピングしたもの  
(ピンク色が濃いところが多い)

<sup>12</sup> 今回は無料の QGIS を利用している。

## A- スクミリンゴガイの卵を効率的に検出しマッピングするシステム

情報機械システム工学科 3年B組16席 三野 琳久 指導教員 中井 一文

### 研究背景と目的

#### ■研究背景

スクミリンゴガイは、田植えから稲の収穫までの期間に食害を起こしている。食欲旺盛で繁殖力も強いので、急速に被害が拡大していく一方である。その被害を軽減するために、効果的な被害対策を組み合わせ、地域ぐるみで取り組む必要がある。

#### ■目的

本研究では、スクミリンゴガイによる食害を防ぐ地域の活動を支援するため、地域住民がスクミリンゴガイの卵を効率的に発見できるシステムを開発する。

ピンク色領域の検出の際に、精度を上げるため膨張・収縮処理をおこなう。膨張処理で二値化画像の白領域を増幅し、収縮処理をおこなうことで、白領域の欠けていた部分を補間する。



図3 膨張収縮処理の画像

### 概要

#### ■システム概要

本システムはドローンで撮影した水田の画像からスクミリンゴガイの卵を検出し、マッピングするシステムである。

主な処理は2つある。1つ目は水田の画像から卵を検出する処理である。2つ目は検出した卵をマッピングする処理である。

地域住民は作成されたマップを使って、スクミリンゴガイの卵の駆除をおこなう。

### 表示方法

#### ■SHPファイルを作成する処理

SHPファイルはおもにGIS（地理情報システム）で使用されるフォーマットである。水田の画像が撮影された位置の座標をGISソフトで読み込ませるために作成する。



図4 SHPファイルに持たせる情報



図1 処理の流れ

### 検出方法

#### ■元画像の撮影

画像は地域住民がドローンで撮影したものを使用する。画像処理はGoogle Colabでおこない、出力された画像をGoogle Driveで地域住民に共有する。

#### ■画像処理

元画像のピンク色領域を卵とみなし、バウンディングボックスで囲い検出している。処理の流れは以下の通りである。

1. 元画像を、RGBからHSV色空間に変換する
2. 変換後の画像からマスク画像を作成する
3. マスク画像から白色の部分のピクセル座標を取得する
4. 取得したピクセル座標を用いて、元画像の卵をバウンディングボックスで囲う

図2の「マスク画像」で卵の数を取得する。その後、画像番号と卵の数をテキストファイルに記録する。



図2 画像処理の例

#### ■卵の位置を可視化

「QGIS」というGISソフトを使用する。作成されるSHPファイルには「画像の緯度経度」と「卵の数」が格納されている。そのSHPファイルをインポートし、QGIS内の地図上に点を表示する。

また、QGIS内の設定で、「amount」の数によって点の色を変更することができるため、その機能を用いてヒートマップを作成する。



図5 QGIS内の画面

### 現在の状況

- 卵の数と画像番号がテキストファイルで確認できた
- 作成したSHPファイルからQGISでマッピングできた

### 今後の予定

- 卵検出の精度を向上させる
- 卵だけではなく、成貝の検出もできるようにする
- QGISから直接画像を確認できるようにする

図 18 プログラムを作成した学生の学内発表資料



なお、今年度は稲作のシーズンが終了したので、次年度も継続して撮影と分析を続ける予定である。なお、次年度は卵だけでなく成員を探すことにも挑戦したい。



終わりに

東日本大震災から 14 年。

今朝、出掛けのニュースで「かくれ空き家」が増えているとのこと。なにかといえば、災害公営住宅でお亡くなりになったりして、空き家になっているが、家財道具の引き取り手や相続人が見つからずにそのままになり、空室なのに次の入居者が入れない状態であるという。それが、岩手、宮城、福島 of 被災三県で 100 戸以上ある、とのことであった。

災害公営住宅は、つまりは町営、市営住宅であり、市町村の管理となる。そこに新しい入居者が入れないということは自治体の負担が大きいことになり、由々しき事態であるといえる。家財道具は当然亡くなるまで使っていた物なので、時間を空けなければ使えるものがあるが、引き取り手がないという。

生物学の概念に「動的平衡」というものがある。私の拙い理解では、生物の細胞などは粒子レベルで見れば、常に入れ替わっていて、でもその生物の個体としては損なわれない。変わり続けることが平衡していて、それが「生きる」ことである、との概念であろう。

人の住まう「地域」というものも実は同じで、そこに生きる人々はせいぜい 100 年までの有限の生を生きており、いつかこの世からいなくなる。しかし、いなくなった人の代わりにまた新たな生命が生まれたり、あるいはよそから人が来たりすることによって、「動的平衡」が保たれていく。そう考えるときに、この「かくれ空き家」は「動的平衡が破れた状態」つまり、病気の状態であるといえるのだろう。この概念は、ちょうどドーナツが転がるような図で説明されることが多いが、そのドーナツがどんどん欠けていく状態に、今多くの地域がなっているのかもしれない。

変わり続けること。生きること。これは実は同じである。地域は変わり続ける必要がある。過去のどの時点に戻ろうとしても、それは「動的平衡」が破れた状況となる。わたしたちは、今そこにある地域をしっかりと見つめ、それが今だけの姿であることを銘記し、そして未来にどの様になっていくのかを模索し、平衡を保つように工夫し続けなければならないのだろう。そんなことを考えた。

最後に、本研究事業にご助力いただいた地域の皆さん、関係協力機関の皆さん、本学事務職員及びアルバイト学生諸君、そして玉城町役場職員みなさんに厚く御礼を申し上げる。ありがとうございました。

令和 7 年 3 月 6 日  
皇學館大学教育開発センター准教授  
池山敦



令和6年度玉城町第7号 明るい未来づくりに関する調査研究 資料

地域でのワークショップ

No.	タイトル	実施場所	実施年月日	備考
1	下田辺地区 子どもまちあるき	下田辺公民館	令和6年12月14日	13名参加
総参加者数				13名

コミュニティのあり方研究会

No.	タイトル	実施場所	実施年月日	備考
1	第1回研究会	オンライン	令和6年8月15日 10:00~11:30	
2	第2回研究会	オンライン	令和6年10月21日 10:00~11:30	
3	第3回研究会	オンライン	令和7年2月7日 10:00~11:30	

コミュニティ支援担当者会議

No.	タイトル	実施場所	実施年月日	備考
1	第1回会議	オンライン	令和6年7月22日 13:30~15:30	
2	第2回会議	オンライン	令和6年8月19日 13:30~15:00	
3	第3回会議	オンライン	令和6年9月19日 13:30~15:00	
4	第4回会議	オンライン	令和6年10月22日 15:30~17:30	
5	第5回会議	オンライン	令和6年11月27日 9:30~11:30	
6	第6回会議	オンライン	令和6年12月19日 13:30~15:30	
7	第7回会議	オンライン	令和7年1月20日 9:00~11:00	
8	第8回会議	オンライン	令和7年2月27日 9:30~11:30	

## 地域別懇談会

No.	タイトル	実施場所	実施年月日	備考
1	田丸地区	田丸小学校	令和6年9月24日	
2	下外城田地区	下外城田小学校	令和6年9月25日	
3	外城田地区	外城田小学校	令和6年9月26日	
4	有田地区	有田小学校	令和6年10月4日	

**令和6年度「玉城町明るい未来づくりに関する調査研究」における  
ワークショップ実施報告書**

<b>タイトル</b>	下田辺地区 子どもまちあるき（2年目）
<b>開催日時</b>	令和6年12月14日（土）9：00～12：00
<b>開催場所</b>	下田辺公民館及びその周辺
<b>参加者</b>	子ども15名、大人3名
<b>スタッフ</b>	皇學館大学教育開発センター池山敦准教授・学生3名、鳥羽商船高等専門学校学生3名、Mブリッジ1名、地域支援マネージャー石丸氏、玉城町役場総務政策課1名
<b>当日のスケジュール</b>	
09：00	事業説明
09：10	ルール説明、アプリにて地図作成 地図交換
09：50	まちあるき
11：10	ふり返り
11：40	終了
<b>概要</b>	
<p>今回のワークショップは、まちあるきを通して下田辺地区の子どもたちが自分の住む地域の危険箇所（災害発生時、交通事故、防犯等）をまちあるきを通して知り、地域住民とともに暮らしやすい地域について考えることを目的に、子ども会の行事の一環として実施した。</p> <p>冒頭、玉城町と皇學館大学・池山敦准教授が挨拶をし、ワークショップは皇學館大学の学生がファシリテーターとなって進行した。まずは2つのグループに分かれた子どもたちが、鳥羽商船の学生が作成したアプリ「ロゲミン」を利用しオリジナルの「危険箇所マップ」を作成。会場である公民館から半径500mの範囲内に自分たちの知っている情報をもとに8か所のポイントを設定した。どんなポイントを設定するか話し合い、子どもたち独自の目線から「車がたくさん通る」「電車が通るふみきり」「歩くところが狭い道」などのポイントを設定していた。その後、他のグループと地図を交換。実際のまちあるきでは、地図に書かれた8か所のポイントの中から5か所を選びまわるため、回るポイントや道順、ルートを相談して決め、出発した。</p> <p>まちあるきは「ロゲイニング※」というゲームのルールをアレンジして、到達したポイントにより得点を競うゲーム形式で実施した。各ポイントに到着したら写真を撮影し、次のポイントへ向かった。なお子どもたちのグループには学生や大人が付き添い、安全に配慮した。また危険箇所を訪れたときに大人が「なぜ危ないか」「どうすれば危なくないか」などを問いかけ、子どもたちと一緒に考えた。</p> <p>全ての班がゴールしたら、自分たちが回ったポイントの得点を計算し、優勝の班を表彰した。また参加の記念として、自分で絵を描いてつくるオリジナル缶バッジの制作も行った。</p> <p>ワークショップを通じて子どもたち自身が地域を“危険箇所”という視点でふり返り、また地図の作成や一緒に歩くことを通して他者の目線から気づきを得る機会となっていた。また大人にとっても子ども達と一緒に改めて危機管理について考える機会となった。</p> <p>参加した子どもからは「地域をみんなで歩いて楽しかった」などの感想が聞かれた。</p>	

※ロゲイニング…地図、コンパスを使って、山野に多数設置されたチェックポイントをできるだけ多く制限時間内にまわり、得られた点数を競う野外スポーツ。

## 実施風景

### 〈ロゲミンをつかったまちあるきマップ作成〉



大学生による進行



商船学生によるアプリ説明



まちあるきマップ作成

### 〈まちあるき〉



まちあるき



危険箇所の撮影



まちあるき後のふり返り



缶バッジづくり



優勝グループの表彰



集合写真



## 令和6年度 第1回玉城町コミュニティのあり方研究会 議事録

開催日時：令和6年8月15日（木）10:00～12:00

開催方法：WEB会議システム「Zoom」を使ったオンライン開催

参加：浅見雅之氏、池山敦氏、石丸隆彦氏、伊藤純子氏、名取良樹氏、橋本大樹氏（50音順）

オブザーバー：東京大学学生5名

### ① 挨拶など

#### ● 玉城町体験学習プログラムに参加した東大生よりひとこと

（学生1）地元が団地でコミュニティを意識した経験がある。就職するにあたり、鉄道、ディベロッパーなどの民間からのまちづくりに興味がある。色々な観点からのまちづくりを学びたいと参加した。

（学生2）出身が地方。東京一極集中など人口減少時代の地方の難しさを知り、地方自治の現場に関心がある。

（学生3）卒業後、行政で働くこともあり、地域や国の社会をどうつくっていくことができるかについて関心がある。市民と行政がどう連携して社会をつくっていくことができるかに関心があり、学びたいと思い参加した。

（学生4）行政に興味がある。少子高齢化などどういう国家規模の課題について、地方自治の現場でどのように表出し、どのような方策がされているのかを学びたいと思い参加した。

（学生5）地元愛が強い。ボランティアでさまざまな地域活性化プロジェクトに関わっている。玉城町に来たのは初めてだが、地域の隠れた魅力を見つけ出したい。

#### ● 玉城町役場まちづくり推進課・中川課長より挨拶

研究会は4年目を迎え、玉城町の政策を考えるうえで心強い組織となっている。昨年度までは地域問題研究所に委託し、3年間かけて小学校区のまちづくりに取り組んできた。今、それらの取り組みが芽を出してきている。今年度から地域問題研究所が離れ、4年目は石丸氏が集落支援員として活動を始めた。研究会の成果を色々な見えるかたちにして町民に還していきたい。

### ② 委員自己紹介

#### ● 石丸隆彦氏（玉城町地域支援マネージャー）

7月から玉城町の地域マネージャーとして、集落支援員制度を使い活動している。地域コミュニティとのつながり方に関心を持っている。地域で活動している人、想いを持つ人とのつながりの広げ方の難しさを感じている。

#### ● 名取良樹氏（シェアスペースCBD管理人）

昨年まで玉城町の地域活性化起業人であり、現在は玉城町にあるシェアスペース・宿泊所の管理人をしている。玉城町は観光資源がなく、観光の取り組みは難しいのではと諦

めていたが、予約も入るようになり、玉城町の観光の可能性を感じている。

- **伊藤純子氏（静岡県立大学看護学部助教）**

専門は公衆衛生看護。保健師の養成をしている。ニュータウン、新興住宅に住む人の健康づくりに関心があり、調査をはじめている。ニュータウンにはネガティブなイメージがあり、社会問題的に扱われている部分もある。しかし分析の結果（途中経過）によると、コミュニティ意識があり、社会活動にも参画していることがわかってきている。必ずしも大きい自治体や古くからの自治体がいいのではなく、地域のコンパクトさ、歴史がはっきりしているという特性を上手に活かしつつ介入していくことでコミュニティがうまくつくられていくのではないかという手応えを感じている。

- **橋本大樹氏（一般社団法人東北まちラボ代表）**

宮城県山元町でまちづくりの仕事をしている。神戸出身。限界集落の集落支援アドバイザーをしており、震災後から復興のまちづくりに携わっている。10年目。令和型の地域運営組織のつくり方に取り組んでいきたい。

- **浅見雅之氏（人・まち・住まい研究所）**

建築設計業。普段は神戸市内で地域支援、地域再生支援のお手伝いをしている。また兵庫北部の蕎麦屋の社長として、50軒規模の集落で自治会が100%出資した株式会社を運営している。自治会の上位バージョンとして地域運営組織やRMOはうまくいっているところが少ないと感じている。原因は「O（Organization：組織）」ではないかと考えている。RMP（P=place、plaza：場）がいいのではないか。みんなが集まってわいわいする場所を同時多発的につくることでうまくいくのではないか。しかし役場は「組織」にはお金をつけやすいが、「場」にはお金が出しにくい。今、行政が「場」にお金を出せるような仕組みを一緒に考えている。

- **池山敦氏（座長・皇學館大学教育開発センター 准教授）**

- 地域連携、地域課題学習。伊勢志摩定住自立圏との連携をベースに、地域に学生を送り込む教育プログラムのコーディネートをしている。研究テーマとして“行政区長”に関心を持っている。町内会長は任意組織の「住民から選ばれた代表」であり、市町村から役割を委嘱する制度である。全国で500自治体にそういった制度がある。
- この事業では玉城町の地域コミュニティをいかに持続させていくかを考えていきたい。玉城町は比較的人口が保たれ、平均年齢も若く、流入人口が一定程度あるが、流入する新しい人と旧来の地域の人同士がうまく交われない、地縁的なつながりが弱くなっているという課題もある。

- **堀江優太氏（玉城町役場まちづくり推進課）**

今年度からまちづくり推進課に異動。昨年入庁した。前職は一般企業の営業職。地域とのつながりについては初心者だが、さまざまな地域の会議に出るなかで集落内の人間関係、暗黙のルール等の難しい問題に直面している。

- **今年度何をするか**

- 1) **地域住民参加型ワークショップの開催**

- 住民向け：水害などの防災をテーマに地域のみなさんに話し合いをしてもらう

- 子ども向け：地域の徒歩圏内を中心にまちあるきをして魅力を発見する

- 2) **研究会の開催（年4回開催）**

- 外部有識者を交えた研究会を実施し、将来に向けての玉城町のコミュニティのあり方について検討を行う

- 3) **地域の状況を可視化するために UAV（ドローン）をつかった地域情報の収集**

- ジャンボタニシ（スクミリンゴガイ）を見つけてマッピングし、駆除の計画を練る。

- 4) **コミュニティ支援担当者会議のファシリテート、小学校区地域懇談会等における専門的知見からの助言**

- 5) **報告書の作成**

- **昨年度の議論の内容**

新しく玉城町の中に入ってきた方に聞き取り調査を行った。農地を開発した数軒単位の団地などで既存の自治会に入っていないケースが多くみられた。住民らは、必ずしも入りたくないわけではないが、何らかの事情で入れないでいる。自身も自治会などの話し合いの場は必要だと思うが、自分が主導して自治会を設立するのは難しいと感じている。農家中心の旧来の自治区に入ることの難しさがある。既存のコミュニティが出来あがっており、町内につながりがないと情報が得にくいという課題もあった。それらから、既存の自治会との折衝、転入者同士で今後話し合いの必要性などがみえてきた。

- **昨年度までに見えてきた今後の施策について**

- 1) 地域情報へのアクセス強化（新入居者に対する情報）

- 2) 地域における話し合いの支援（既存自治会と転入者、転入者同士の話し合いの支援）

- 3) 自治区の役割とメリットの啓蒙（大きな災害があったときの生存確認等）

- 4) 住民主導のプロジェクト支援（共通の趣味など目的別につながったコミュニティの支援）

- 5) 多世代交流の促進

- **今年度の研究会について**

地域問題研究所のサポートが終わり、今後の地域のサポートを集落支援員（石丸氏）が担うことになった。石丸氏が集落支援員として地域コミュニティの支援に取り組んでいくが、1人で全て取り組むには限りがある。優先順位や有効な進め方などについてご助言をいただきたい。

### ③ 集落支援員業務内容について

- 集落支援員という総務省の制度を使い「地域支援マネージャー」として7月1日に任命され、活動を始めている。
- 特定の地域ではなく、玉城町全体の集落支援員として活動する。

#### • 集落支援員の役割

過疎地域などの集落の維持・活性化のため、地域の事情に詳しく、集落対策の推進に対してノウハウを有する人材が、集落の巡回、状況把握、住民同士の話し合いの促進、これらを通じて必要とされた具体的な取組やその取組主体となる地域運営組織などのサポートをする。

- 「小学校区を中心とした地域のつながり創出とコミュニティ活動の促進」というテーマのもとに9つの活動を行っていく

#### 〈9つの役割〉

##### 【地域分野】

- 小学校区別地域懇談会について
- 集落の情報収集・点検
- 自治区加入促進支援サポート
- 先進自治体研修の企画・運営
- 玉城町地域つながり特命系の活動支援及び協働実施

##### 【コミュニティ分野】

- 地域コミュニティ活動のサポート
- 地域コミュニティ補助金の活用支援
- サポートデスクの設置・運営
- コミュニティ育成セミナーの開催

#### 1) 小学校区別地域懇談会について

- 小学校区懇談会（8月末～開催）は、住民に集まってもらい、テーマを投げかけて、直接住民から意見をいただくもの。来年が玉城町誕生70周年になる。70周年に向けて何かできないかと言う意見交換をする予定。特命係と一緒に実現性、アクションにつなげていきたい。
- 昨年度からの動きでは、自主防災会を立ち上げた自治会があり、子どもたちを中心に非常食の試食パーティを実施した。自治区のなかで防災キャンプのお試し会や持ち寄りイベント（新米を食べよう）を企画し、防災の備えなどのきっかけ、防災意識の向上をねらいとして実施している。また子どもたちの居場所づくりとして、地区の地区学習等供用施設を週1回子どもたちが宿題したり、遊んだりする場として開放する例もある。小学校の地域学習と連携して、子どもたちに伝統文化「獅子舞」を知ってもらい、興味を持ってもら

うための取り組みもある。

- (現状の課題) 昨年度までの取り組みが組織づくり、団体づくりまでは至っていない。現実的に動き出すにはお金の問題などが出てくる。補助金などの活用を考えると「組織」でないと難しい。また役場主催のまちづくり会議がきっかけで生まれた団体なので、有志が集まったという建付けではあるが、心のどこかで役場がやってくれると思っている。

## 2) 集落の情報収集・点検

7月、役場の地域担当職員が自治会長に広報紙を届ける際に同行させてもらった(2自治区) 実際は、話をするのは難しく、今後の課題がみえた。

## 3) 自治区の加入促進

町として転入者にどのような案内をだしているかを調査している。

## 4) 先進自治体研修の企画・運営

視察先に鳥羽市安楽島自治会を想定している。誰もが訪れるゴミ捨て場を活用した情報発信や子どもを絡めた防災の取り組みなどを行っている。手が届きそうな自治体の取り組みを視察することで機運を高めたい。

## 5) 玉城町地域つながり特命係の活動支援及び協働実施

昨年度もさまざまなイベントをしたが「イベントを1回実施して終わり」「職員が主になりすぎてしまい、住民をうまく巻き込めなかった」などの課題もある。町民をうまく巻き込めるようなイベントの支援が必要。特命係の職員らは、業務として任命され、部署の担当業務もいっぱいの中で取り組んでいる。職員のモチベーション、内部の調整などに課題を感じている。

## 6) 地域コミュニティサポートデスクの設置運営

週1回、特定の場所(保健福祉会館のフリースペース)に設置する。それ以外でも予約すればZoom、オンライン、対面で対応する。

## 7) 地域コミュニティ活動の支援

立ち上がった活動の支援を行う。

## 8) 地域コミュニティ補助金の活用支援

今後、70周年に向けて助成金ができるので、団体の設立とかも含めて支援していきたい。

## 9) コミュニティ育成セミナーの開催

「70周年」という大きな旗印があるので、住民の「やりたい」を「やる」に変えるきっかけのひとつとして、想いを実現するためのセミナーやSNSで使える動画作成などのセミナーなどを企画していきたい。また話し合いの場で役立つファシリテーションなども研修ができれば。

## 10) その他地域づくり活動の支援

情報発信の難しさがあるので、情報発信、情報収集の視点から何かできないか。

#### ④ 集落支援員業務内容についての議論

- サポートデスクは昨年度から継続している。令和5年度の実績。相談数、相談から次どうなったかなどを知りたい。
  - 昨年度は、毎週火曜日 10 時～14 時@保健福祉会館で実施した。年間 28 回実施。
  - 相談件数は 27 件（継続的に複数回来る人も含む）。最も多いのは、博覧会に向けた相談。福祉会館の職員が相談に来ることもあれば、農家の担い手不足に危機感を持つ方が「農地の担い手が減るなかで、法人化するにはどうすればいいか」などの相談もある。自主防災会の相談、その後の動きの進捗報告でみえる方もいる。
- 先進自治区視察についての情報共有。9/22 に浅見氏が鳥羽市安楽島に視察へ出向く。
  - 石丸氏も同行させていただく
- 集落の情報収集・点検について。どうすればいいのか。集落の数が多いので、顔を知ってもらい、役割を知ってもらいだけで終わりそう。
  - 現在チラシをつくっている。町の広報に掲載された町長と一緒にうつっている写真を使い、作成している。
  - 住民の人から見ると、業務内容だけを見てもイメージがつかないのでは。
  - 中身はどうでもいいので、町長と映っている写真を見せることに信頼感がある。
  - 69 自治区あるので、とりあえず一周した方がいいのでは。
  - 各自治区の日程を把握しているのか？
    - ⇒ 区長会は年末と 2 月にあり、地域担当が広報を届けるために毎月訪問している。大きい自治会は役員会などがあるが、町ではその日程の詳細までは把握できていない。
    - ⇒ 各区のイベントの情報などは、各地区の地域担当が把握している。
    - ⇒ 地域のまつりの情報をわざわざ発信して、地域外の人に積極的に参加してほしいと思っていないのではないか。祭りではふるまいがあるが、その資金は自治会費から出ているのだから、誰でもウェルカムではない。区民とお友達（関係人口）なら OK という建付けが多い。
- 役場に対しては言いにくいですが、石丸さんには相談してみようと思ってもらえる関係をつくるまでが一仕事。簡単な言葉でいうと信頼関係だが、そんなに簡単ではない。自治会長も 1 年で変わってしまうという現状もある。
  - 関係には地域によって濃淡があっては良いのではないか。69 の自治区全てに対して平等に関係を深めることは難しい。
- 地域との関係について。すべての地域と平等に関係性を保つのは難しい。どうしてもやりやすいところに集中してしまう。一方で、地域の情報は外に出ていかないが、お互いの情報はとても気になっている。オープンにしていない情報も他の地域の人を知っていることもある。石丸さんがどこかの地域に関わり、一石を投じることで、他の地域にも

波紋的に広がっていくのではないか。

- ボッチャの話。宮城県の平均 20 世帯の 3 つの地域の連絡会を実施している。同じ条件の地域を集めた情報交換会である。さまざまな課題や現状を共有するなかで、ある地域が「ボッチャが楽しい」という話題になり、3 地域合同ボッチャ大会を実施した。楽しいことをきっかけに、やりやすいところからはじめて本音の議論につながれるとよいのでは。
- 地域運営について、もともと行政がすべきだったことが動いていない状況があった。第三者が媒介し、話し合いができればはじめると行政ものってくるようになった。はじめはとりあえず文句をきく回が 2, 3 回続くが、意見交換し、他の地域の情報を伝えると知りたいという意識が生まれてくる。それらの蓄積の 4 年間でボッチャ大会になったと考えている。
- 集落支援員は、地域と地域の媒介になるといいのでは。「〇〇の地域ではこうしている」「〇〇の地域はこんなことをしてた」などを伝えることで、似ている地域の情報交換を促すし、つなげていってはどうか。
- 「あなたのためにやっている」というふれこみに良いものはない。「あなたのために」ではなく、集落に行って話を聴くことで、聴く構えがあることをわかっていることが大事。
- 「石丸さん、なぜうちの地域に来てくれないのだろう？」と思ってもらえるとよい。
- シェアスペースをしていて近隣の受け止め方はどうか。
  - 見知らぬ人が出入りする状態はスタートして間もない。単身で入った段階では、都市で生活するよりは周辺の方は意識を向けてくれていたが、想像するよりは希薄だった。見ているけど見ていないふり。
- 69 自治区すべてと深い関係性になることは難しい、というのは共通認識。では、リソースが余ってればそれをするべきなのか。一品一様で深く、という状態が理想だとは思ってない。取り組み自体に行政がのってくる文脈を描くのが自治区に対してもよいのでは。成功事例を提供する。前向きなやる気のあるところを吸い上げるスタンスで、そのためのメニューが用意できていれば OK という粒度で展開するのがいいのではないか。
- 健康状態において、全員の健康を保たなければいけないときのアプローチはどうか。
  - 公衆衛生では、行政の立場として濃淡はあっても全体に目配せする必要がある。その場合、各地域にミニ保健師（保健推進委員など）といったボランティアや自治会で選任された人を集めて、保健師が直接回るのではなく、保健師が伝えたいことを代わりに情報伝達してもらおう人を育てる、という戦略をとっている。
  - 濃淡はあるにしろ、石丸さんの存在が広く認知される必要がある。TikTok は発信する人だけでなく、サポートする人（モデレーター）がいて成り立つ。玉城町では、口伝が強力な情報伝達手段ではないか。そういう人をどう育てていくかがポイント。

ントになる。

- 催しをするときに来る人は、自治会長や民生委員など固定化しやすい。現在のキーパーソンとかぶらないような、次世代の新しい人材、これまで地域に出てきていない人を開拓して育てる意図的なしかけが必要だと感じている。人材養成講座を開催することはよいが、来てほしい人に対する根回しは必要。白羽の矢を立てるときに、行政や地域の人と相談してアプローチできるとよい。
  - その人がセミナーや研修の講師になってもらい、その人のコミュニティから参加者と石丸がつながるような仕組みがつけられるとよい。
- 悩ましいのは「自治区の支援」と「地域の活動者とつながること」に階層の違いがある。自治区は既にある形が決まっている。地域の活動者を発掘してつながっても、自治区とはつながらない。レイヤーは2層ある。しかしそれを乗り越えようとする動きもある（例：とのまち縁日。目的別コミュニティの地元のNPOが自治区の協力を得ながらイベントをする）。レイヤーを行き来できるのが地域支援員（よそのもの）としての強みである。双方のニーズを把握しないとつなぐことができない。双方が活躍できるための橋渡し、通訳のような人材は、よそのもの（異物）としての集落支援員だからこそできる。接着剤は間に異物があってくっつく。面と面だけではくっつかない。
- レイヤーをつなぐのは大事。全てを把握しようとする、1集落で1年かかる。集落の情報収集、点検については、こちらから取りに行くのではなく、向こうから喜んで差し出すような仕組みができないか。ケーブルにテレビに取材に来てほしい人は、ここに提出したらよい、という窓口をつくるとか。出すと何か良いことある、というプラットフォームがあれば集まってくるのでは。
- 玉城町で検診の受診率が上がった話。案内を個人別にカスタマイズして送付することで検診率が35%あがった例がある。これまでは世帯宛におくっていたものを個人宛に名前を入れて送ったら受診率があがった。
  - マーケティングの世界では「各位」で一律の情報を流しても「私に関係ない」と思われる。「あなたに向けた情報」と伝えることで返信率が上がったりする。
  - 自治区の地域カルテを見て、再考して、何かの基準で線をひく（例：高齢化率○%以上、空き家率○%など）ことで、地域の困りごとに合わせたクラス分けをしてアプローチをかける。「○○で困っていませんか？」などの案内をすることで、リーチ率が高まるのでは。
  - 情報がひとりでも集まる仕組みをつくる。あがってきた声から、まずは「聞きに行くきっかけ」をつくる。
- レイヤーがあり、レイヤーの扉をこじあけるのが地域支援マネージャーの役割ではあるが、やっぱり69自治体全て回るのは大変という流れのなかで、69自治体がそれぞれに横でつながり、自分で課題を解決してくれたら地域支援マネージャーの負担は軽減する。横をつなぐことも大事。その際、ボッチャや盆踊りなど楽しみごとでつながりがち



だが、そのつなぎ方に疑問を持っている。ポッチャや盆踊りを「やって終わり」なら何もならない。ポッチャの事例は、3つの地域が連合で行えたことには意味がある。横つなぎの扉をどうやって開けていくか。石丸さんがどうやって手を抜けるかと考えるのがよいのでは。

- ▶ ポッチャの事例は、課題解決のための情報共有をするなかで出てきた話題。課題の共有から始まるという流れ。玉城でもそういう流れはありそうだが、今すぐではない（次のステップ）とも感じる。
- 地域カルテの利用について。保健師の業界では地区ごとに検診の受診率、糖尿病の率などをランキングして返すと住民にすごく反響がある。よそと比べてうちが低い・高いは直接的なモチベーションになる。このやり方は農村型の旧コミュニティには効くのではないか。ただ一定の効果は見込まれるが、賛否両論あるやり方であり、差別的になるなどの危惧もある。やり方としては、トップ3のみ示すなど、出し方の工夫はできそう。玉城町内でも地域の課題や現状に濃淡があり、地区で違いがあることは客観的に言われないと気付かないことがある。
  - ▶ がんばっている自治区にがんばってますね、と伝えることはしたい。自治区の活動はボランティアな精神だけなので、誰かが自己肯定感を高める必要がある。それが集落支援員の役割だと考えている。がんばっていることは中にいると気付かない。がんばっていると客観的に言えるのは外にいる人だからこそ。ポジティブな指標を使っていくのはよい気づきにつながりそう。
  - ▶ 営業マンが営業成績のグラフを壁に貼り付けられてやる気をなくすというような影響はないか。
    - ⇒ ある。そこを伴走する保健師がしっかり介入する。経験があり、熟練している人だからできる。ネガティブだけど、だからフォローするという仕組みがあれば、それをモチベーションに1年間頑張ってみようという方向につながっていく。
    - ⇒ 3対33の法則がある。いいことは3人にしか言わないが、悪いことは33人に言うというもの。自慢大会よりも、ダメ情報、ネガティブ自慢大会の方が盛り上がり、広がるのではないか。自分の地域のだめな部分をネガティブ自慢（最下位自慢）するのはどうか。（他の地域のことをいうと悪口になる）
- （石丸氏より）現在は、手探りでやっているのが現状。どこから手を付けるか悩んでいたが、現場で活躍されている方の意見は参考になる。試してみようかというヒントが見つかった。有意義な時間をいただけた。
- 全てをやろうとせずに、メリハリをつけながら取り組んでいってはどうか。

## 令和6年度 第2回玉城町コミュニティのあり方研究会 議事録

開催日時：令和6年10月21日（月）10:00～12:00

開催方法：WEB会議システム「Zoom」を使ったオンライン開催

参加：浅見雅之氏、池山敦氏、石丸隆彦氏、伊藤純子氏、名取良樹氏、橋本大樹氏（50音順）

### ① 挨拶など

#### ● 池山氏より挨拶

先週末、とのまち縁日が盛況のうちに終了した。来年が昭和の合併から数えて70周年になる。それに向けた取組みや、また必ず訪れるであろう災害へ向けてできることを考えていきたい。

#### ● 玉城町役場まちづくり推進課・中川課長より挨拶

台風が生まれたとニュースで聞いた。玉城町では過去に10月に来た台風で大きな被害を受けた。その時のことを思い出し対策を考えている。また今、玉城町では各小学校区の地域を残しながら持続可能なまちづくりにつなげることを大きなテーマに掲げている。各小学校区でのまちづくり会議では、住民からたくさん案をいただいたが、直接的・間接的な視点の両方でどう行動を起こしていくか。町政70周年に向け、またその後の100周年も思い描きながら、今できることを進めていきたい。

#### ● 各委員よりひとこと（近況）

（橋本氏）浅見氏と一緒に新温泉町に出向き、ひろばのデザインワークショップと住民が作ろうとしている“人が集まる場所”のワークショップをしている。

（石丸氏）週末は、田丸駅前の商店街であったとのまち縁日の手伝いに行った。親子連れが多いイメージがあったが、子ども同士で訪れている小学生もおり、雰囲気がとてもよかった。

（名取氏）玉城町の地域おこし協力隊の採用支援に携わっている。11月上旬に現地見学会として、暮らし体験のイベントを予定。一般参加者6名。準備を進めている。

（伊藤氏）今、関心を持っているのは地域支援の「単位」をどう考えるか。従来は「行政区」を支援対象とすることが当たり前とされてきたが、本当にそれが妥当なのか疑問を持っている。柔軟に対象の単位の見直しをする必要性を感じ、文献等を調べている。

（浅見氏）玉城町町長と面会。町民の危機感がないことに触れていた。危機感はおおすぎると萎縮する。うまく共有していくにはどうすればいいか。防災意識は高まっているが、備蓄だけでなく「その先」の意識を高める必要性についてなどの話をした。

（玉城町役場堀江氏）小学校区別の会議に参加し、町民からの意見をたくさん聞いた。町民がやりたいこと、してほしいことをいかに事業に落とし込めるかについてアドバイスをいただきたい。

## ② 玉城町制 70 周年町民主催行事の進め方について

### ● 玉城町地域支援マネージャー・石丸氏より

- 来年度が町政 70 周年。地域全体で祝い、まちづくりへの意識の高まりに繋げたい。
- 地域支援マネージャーからけしかけて、住民主催行事をしたいと考えている。それをきっかけに地域力を高めていきたい。
- 具体的には、大小さまざまなイベントを集め、一定の期間中に開催するイメージ。  
(メインは秋頃を想定)
- 小学校区別会議(4地域)を9月末~10月頭に開催した。参加者は区長、自治会長、PTA、民生委員など。「地域らしさを活かしたより暮らしやすい地元づくり」に向けて話し合う場として設定。共通テーマに「100周年に向けて、70周年の今、地元でできること・みんなで一緒にできること」を据えて話し合った。
- 話し合いでは、最初に玉城で暮らすときの満足度を聞き、そのうえで足りない部分を埋める(満足度を高める)ために地元でどんな取り組みができるかを問いかけた。
- どの地域でも全体的に多かった意見は、新旧の住民同士の交流、世代間交流など。
- 会議では出た意見に対して投票をした。中でも得票が多かったのは、畑付き団地(人の定着、地域らしさ)、自分の知識や能力を発揮できる場がほしい、通学路の草刈り(有田地域)など。
- 出てきた意見をどのように受け止めるか、抽象的な意見に対して具体的にどうしていくのか⇒実行委員会をつくる。今、活発に活動している人や、若い人に声をかけていきたい。また町民主導で動かしていくとともに、特命係(町長から任命を受けた若手の役場職員)と一緒にバックアップやフォローをしてもらう。(実行委員会のメンバーにはいるかどうかは要検討)
- イベントのイメージは、町全体のものもあれば、小学校区単位もあれば、場合によっては小学校区対抗のイベントなどをしても面白い。
- まちづくりに関わってもらうきっかけ(特に新しい人を巻き込む)としたい。
- 課題は、どうやって新しい人を巻き込むか。
- (玉城町からの補足)実際の活動していく姿がまだまだ見えにくい。誰がするのか、お金はどうするか、などの具体的なことをどうしていくかを決めていきたい。
- 昨年度まで地域問題研究所が実施していた「たまきつながる博覧会」を石丸氏と実行委員会が担っていく。

## ③ 議論

- 前年も1日だけのイベントではなく、一定期間中に色々なイベントを実施した。
  - 去年はさまざまな活動が行われている印象が弱かった。そこを強く打ち出すことが重要ではないか。(見本市のようなイメージ)

- 浅見氏は神戸市で有野台マルシェの支援をされている。行政支援でスタートしながら、どんどん住民主体になっていった。住民主体になるためにはどうすればよいか。
  - ▶ 役場が両手足持ってあげてサポートするのではなく、例えば70周年のアイコンになるマークを決め、チラシの中に入れたらチラシの費用を出すというルールを作り、住民から申込をしてもらうのはどうか。役場はカタログだけ作り、それが70周年事業だと広報する。役場のすべきことは、集客とプロモーション（アイコンの配布とカタログの作成、広報のみ）。それで大イベントができる。もちろん個々のイベントの内容を確認や、イベントをする人のサポートは必要になるが。有野台のマルシェを成立させた肝は、「場所さえあればお店が来て勝手にマルシェが始まる」ということだった。個々のプレイヤーが支援はしてもらうが、自立的にやらざるをえない形にしていくのがきれいだと思う。4地区それぞれで大イベントをするイメージをされているかもしれないが、同時多発大量イベント大会というのがわかりやすいのでは。
- 玉城町に限ったものはないが住民は「町がやってくれる」という意識が強い。いつまでもそれだと何も動かないので、町の役割はここまで、というように、いい意味で役割分担を線引きし、可視化して、そこに賛同してもらえる人がイベントをつくってもらうことが必要。役割分担をするのは必要だと感じた。
- 同時多発、ロングランはよい。たくさんของกลุ่มの活動が集まるとよい。欲を言えば、70個の取り組みができるとよい。
- スタンプラリーのようにして、イベントに行ったらスタンプを押してもらい建付けはどうか。イベントに行ったら「玉城町70周年」のような必ず幟が立っていて、そこにスタンプがある、というようなもの。7、17、27個…などのスタンプがたまったら景品がもらえるなど。他の地域のイベントに行くきっかけにもなる。
- 役場の役割はプロモーションと集客。そこに特化するとよい。イベントの中身は個々の団体に任せる。公式LINEで70個のイベントを1つずつ紹介していくなど、プロモーションは行政や地域支援マネージャーが担う。
- 名取氏は玉城町内で若手の人を支援している。その視点から若手の参画を引き出すためのコメントをいただければ。
  - ▶ ミナテラスキャンプをしているアカトキさんと今取り組んでいるのは、外部とのブリッジをかけるという企画である。例えば、アカトキを町外に向けてプロモーションするために、神奈川に出向くなど（その逆も）の活動をしている。ポンチ絵を見てすっかりしなかったのは、4小学校区の課題は、おそらく全て違うということ。水害のあった田丸地区は水害の話が出るかもしれないが、地区が変われば、他地区の課題は他人事になる。各地域でのイベントをどのように位置づけるのが少しぼんやりしているように感じた。昨年度の博覧会も目的は何か見えづらかった。「お互いを知る」という裾野を広げるという目的

もあると思うが、もう少しフレームがあってもよい。

- 確かに統一した旗印のようなものがあると、自分たちがどこに位置するのか分かりやすい。一方でイベントの内容は地縁団体なのか、目的別団体なのかによって変わる。目的別のところは想いを持って活動しているので見えやすい。地縁団体の活動は地元だけでやっている感がある。これをきっかけに情報収集し、地元だけの運営がしんどくなっている場合は、どこかとつなげるなどで楽にしていければよい。
- 4つの小学校区で特徴があると思う。田丸地区だと地縁という観点では希薄だが、防災の観点では意識が高まる…など、どんな違いがあるのか？
  - まちづくり会議の質問で、満足度が一番低かったのが下外城田（見立て：後から編入された経緯がある。買い物する場所も離れているからか）。一番高かったのが有田地区（見立て：県道が通り、生活の便がよいからか）。外城田地域はその中間くらい。田丸地域は新しい人と旧来の人混ざっており、高齢化率が高い。
  - 会議での要望は、「公園がほしい」などの意見が多かった。しかし有田地区は近くに県営公園があるのでそれらの意見はなかった。外城田地域は「もっとつながりをもちたい」などの意見があった。
  - 下外城田地区だけ、他の地域から1年遅れて編入（吸収）された背景があるので、70周年事業は来年とその翌年もあっていいのでは。
- どれもこれもひっくるめて括ることは難しい。目的を明確にするのであれば捨てないといけない部分もある。何を重視して、何を優先するかということが明確になれば枠組みを組み立てやすくなると感じた。地縁、目的別など全てを混ぜると薄まる（あえてそうするのもよいが）。
  - 玉城町在住じゃなくてもイベントをすることができたり、町の人が町外でイベントをすることの支援をしたり、もあってもいい。シンプルなルールをつくり、それだけ守ったら70周年事業として認定するのがよいのでは。
  - 地縁による取り組みは褒めてもらいにくい。地縁による取り組みを褒める場所があるとよい。自治区を紹介するケーブルテレビの番組など。69自治区があることも区長は知っていても住民は知らない。
  - 「混ぜると薄まる」ということも確かなフレームのひとつである。
- 伊藤先生から保健や健康などの視点、ニュータウンの研究をされている視点からアドバイスはいただけないか。
  - 「住民主体」からずれないことは素晴らしい。その上で、どうしたら住民主体になるのか、我が事として捉えてもらえるのか。地域には課題がたくさんあるが、魅力やよくできている部分に着目するのがよいのでは。課題やできていない部分をフォーカスしがちだが玉城町には魅力がたくさんある。

- 4地区の関係性をどういうフレームでまとめていくか。自分たちはこれができる、これがいいということを確認するような視点をフレームの中に入れるとよい。よくできていることは言いにくい住民性があるかもしれないが、実際よくできているし、頑張っている。「当たり前だと思っているけど実はよくできていること」を客観的に確認できると、地区に対する関心や愛着、誇りが育つ。それが育つと「できる」「もっとやりたい」が育てていける。
- 有野台の浅見先生の関わりは素晴らしいと感じる。どこかというと徹頭徹尾、有野台をリスペクトしていること。盛る訳ではないが、肯定的な関わり方が有野台の人を動かしていく原動力になる。謙虚で控えめな住民たちが地域のよさを実感できるようなしかけがあるとよい。
- 保健師や公衆衛生の分野では、地域を一人の人間のように見立てる考え方がある。4つの地区がある⇒4人の人がいると捉える。人間だと、例えば身長など、どうにもならないこと、言っても変えられないことがある。変えられることをより魅力的にするために、できることをしていけば自己効力感を高められる。
- 今、職員のアワードを準備している。頑張っている職員を褒める大会。誰かから褒めてもらえる、ということは大事である。その地域版に感じた。
- 表彰のようなものもよい。団体でも、人でも。
- 得票が多かった意見にある「自分の能力を発揮できる場がほしい」は、住民自身も良さを確認したいということだと思う。それを賞賛や評価する枠組みがあるとさらによいと感じた。
- 良さはこちらが見つけないといけない。向こうから言ってくることはない。求人のように「〇〇できる人募集」としてもいいのかもしれないが。それを見つけてるのが、社会参画と就業支援を行う生涯現役協議会かもしれない。
- 橋本氏は、宮城県で地域のまつりのお手伝いをされている。住民主体のイベントを支援している立場からコメントをいただきたい。
  - 正直なところ、まつりがどこまで地域の課題を解決しているかは難しいところがある。例えば、津波の影響で世帯数が8割くらい減った地域で、若手を中心に夏祭りをやろうとしたことがある。その際、役員とは別の実行委員会をつくり実施した。実行委員会のメンバーは、基本的に40、50代までしか入れないルールにした。大切なのは、実行委員会をつくることではなく、実行委員会の人に権限とお金を渡してあげること。せっかく実行委員会で考えたことを長老に持っていったらひっくり返されるといことがないようにした。住民の考えるプロセスや意思決定に寄り添っていくことで自主性が生まれてくる。しかしやり続けていると疲労感が出てしまい、マンネリ化して同じ人が来る、そこで規模だけを大きく盛大にしようとするやるとやる側が大変になるという悪いサイクルには注意すべきだ。同時多発的に地域で色んな活動が見られるのは楽しそ

うだが、まずはどこまで実行委員会が決定し、実行できる体制を周りがつくれるかが大切だと感じた。また行政や中間支援団体が実行委員会と長老の間にとって、実行委員会が動きやすいように調整していくこともポイントになる。

- 70周年なのでもう少し特別感があってもいいのでは。現状の話題では今までの延長線上の活動に感じる。70周年の特別感がないと地域は関心を持たないのでは。打ち上げ花火のように、軸はぶれずに、70周年ならではの特別感があるとよい。
- まずは実行委員会のコアメンバーを集めて、そこに任せたらいいのでは。これまでの経緯や意見をデータとして全て渡して、それをもとに期限を決めて枠組みを考えてもらうように依頼する。それが住民主体ではないか。援護するときは援護する。
- オンラインで玉城の魅力を褒める番組をつくってもいい。健康のデータやまちづくりの指標についてなどを有識者から褒めてもらう。その際、名取さんが言われたように「これは何なのか」のフレーム（目的？）をつくって、そのうえで渡すことは必要になる。それがないと住民が走れない。
- 町としても、実行委員会に任せる方がよいと感じる。そのかたちが今年度うまくいけば、来年度は権限と財源を何とかして、町と実行委員会で委託契約を結び、お金と仕様書だけ渡してその範疇のなかで自分たちの裁量で執行していただけないかと考えている。いちいち役場にお伺いを立てなくてもいいようにする。その際「してほしいこと」の箇条書きをテーマとして明記し、ぶれないようにする。
- 委託契約の場合、法人でなくても任意団体でも可能。（以前、桜祭り実行委員会のときもそうだった）ただ金額にもよる。1000万円などの高額だと任意団体だと難しいかもしれない。
- スケジュールについて。当初予算の査定があるなかで、仕様を書いて契約するときに、11月～12月で企画案があればよいか。
  - ▶ まずはコアメンバーを集め（見つけ）、早速コアメンバーとの話し合いをしていく。仕様書の内容（具体的にになったもの）について、この研究会からも意見をいただきたい。並行して内部調整をしていき、当初予算へ。研究会は年度内に2回すればよいので、状況を見つつ次回は12月または1月くらいか。
- やってみたいとわからないのが本音。丸投げではなく、いい意味で任せることは大事。どんな建付けで声をかけるかがポイントになる。
- 今まで目的を設定するにあたって、足りないところを補う視点がベースにあったが、足りること・できることを分配するというポジティブなテーマに置き換えることで、実行委員会の声のかけ方も変化する。取りまとめるときにも、住民からの「してほしいこと」を吸い上げるのではなく「やれること」を吸い上げると全然違うものになる。その目的のもとにどうテーマ設定するかによって、実行委員会の位置づけも変わる。石丸氏が地域でどういう人がいるかをあぶりだすというのも課題の1つだとおっしゃっていたが、それを「どうポジティブに吸い上げていくか」と視点を変

えるのもよいのではないか。

- スピード感が大事。慣れていない人を集めて進めるのはどうしても遅くなる。全て前倒しにして、やっとオンタイムというイメージ。
- 実行委員会に集まっていただき、まずはキャッチフレーズをつくってもらうのがよいのでは。話すうちに方向性が共有され、タイトルがつくと具体的な動きにつながっていく。
- キックオフは早くて5月になるか。令和7年度に取り組みをしていく、というタイムテーブルで考えていく。
- 地域づくりの素地は既にできている。100人委員会や小学校区の会議を経て、キーパーソンが見えてきている。これからはいかに適切な役割を住民に渡していけるか。
- 地域課題うんぬんよりも、玉城町を肯定し、「玉城に住んでいてよかった」という気持ちになれるイベントになるとよい。
- あまりしんどいことをせず「楽しいことをしよう」(×課題解決しよう、ではなく◎70周年記念フェスしよう、のような)という投げかけがよい。また実行委員会が孤立無援にならないようにしてほしい。周囲から「あいつらが勝手にやっている」と言われないように「町のことをしている」という自負を持てるように。
- 学校区という枠組みがあるなかで、学校区などのエリアに限らない活動やもっと小さな活動を排除するような印象を与えてはいけない。町外の人が玉城でやっている活動も「全てOK」にするスタンスでよいと思う。
- 70周年記念行事をまとめたものが冊子として残るとよい。



## 令和6年度 第3回玉城町コミュニティのあり方研究会 議事録（案）

開催日時：令和7年2月7日（金）10:00～11:30

開催方法：WEB 会議システム「Zoom」を使ったオンライン開催

参加：浅見雅之氏、池山敦氏、石丸隆彦氏、伊藤純子氏、名取良樹氏、橋本大樹氏（50音順）

### ① 挨拶など

#### ● 池山氏より挨拶

- 今年度の研究会は第3回目で最終回となる。本日の内容は、玉城町町政70周年にあたり「玉城町まちづくり交付金」と「住民主体の行事の開催」について。70周年にあたり玉城町まちづくり交付金の見直しを検討している。運用をうまく見直し、より効果の高いものとしたい。また住民主体の行事の開催に向けてもご意見を賜りたい。

#### ● 玉城町役場まちづくり推進課・堀江氏より挨拶

- 70周年ということで、町の魅力を発信するきっかけにつなげていきたい。色々な案はあるが、ご意見をいただきたい。

#### ● 各委員よりひとこと（近況）

（石丸氏）70周年に向けて住民主体の取り組みの方向性について検討している。住民を巻き込みながら進めていきたい。

（名取氏）高松、青森、佐渡など色々な地域に出向いている。玉城町では、地域活性化起業人の任期が終了し、本年度は地域おこし協力隊の採用支援で関わらせてもらっている。3つの協力隊採用を進め、現地見学までは関心を持ってもらえたが最終的には着任につながらなかった。課題も見えたので来季以降に活かしていきたい。一番の改善点は受け入れ体制だと感じた。行政サイドも受け入れになれておらず、協力隊が気にするポイントを温度感として持っていない。不安感を感じさせることも多かった。それをひとつひとつつぶしていければ、マッチングに向けて準備ができる。

（橋本氏）山元町・亘理町も2/1で70周年を迎えた。合同で式典をしていた。

（浅見氏）「みんなの玉城町70周年」のロゴをデザインした。ハーフマラソンを走るために頑張っている。

（伊藤氏）玉城町保健福祉課からの依頼で、「認知症あるあるすごろく」を作成するワークショップを3/1に開催する。静岡県伊豆市で作ったものの玉城町版を作る。認知症の方が増えており、それらの方を地域で支えていくための知識や情報を提供する仕組みとして厚労省が作成した標準教材が少し難しく、固いのでそれをサポートする教材をつくらうとするもの。すごろく型で遊びながら認知症の症状や介護の状況が学べる。すごろくは一般版もあるが「ご当地版」が効果的。認知症はネガティブになりやすい話題だが、ワークショップではできるだけ玉城らしい良いエピソードを引き出す展開にしていきたい。

（池山氏）都岐沙羅パートナーズセンターの斎藤さんが関わる宮城県白石市での小規模多機能自治の勉強会に参加した。白石市ではどこの地域もまんべんなく支援をするのではなく、一生懸命にやっている地域に集中的に支援をしている。その地域が頑張ったことを報告会等で市内に共有する場をつくり、情報を還流させることによって他所からも手が挙がってくるようなアプローチの仕方をされている。どうしても行政は「平等に」という発想になりがちだが「手を伸ばそうとするとところ」に支援をする方法に感銘を受けた。

## ② 玉城町まちづくり交付金の改定について

### ● 玉城町 堀江氏より

- 70周年記念の補助金を交付するために、要項を作成している。町民が企画した70周年記念事業に補助金を出す。補助金には2つの種類がある。
  - 地域活性化型  
補助対象者は、住民自治組織、町内を主な活動拠点にする団体（NPO）、地域の活性化を目的とする団体。町政70周年を記念して、補助対象者自らが主体的に実施する事業に上限30万
  - 集落活性化型  
補助対象者は自治区、自治区に準ずる団体など。補助対象者が主催し、地域内の自治区未加入世帯を含む全世帯が参加可能な事業に上限3万円。
- まちづくり交付金の本体は変わっておらず「別もの」としてつくった交付金。
- 交付金の時限は令和8年3月31日まで。

（意見交換）

- 要項には書けない裏側にある「補助金の理念」を読み取れるものがあるとよい。なぜ飲み食いが必要で、なぜ講師の弁当はよいのか。町がなぜこのお金を出し、出さないのか。この補助金を上手に使うためにはどうすればいいのか。それらは要項には書けないその“解説本”みたいものがあるとよい。言い訳をしようとするものではなく、町民の皆さんと理念を共有することが大切ではないか。
- 説明会をする予定はあるか？大府市ではある補助金の申請手続きのための動画を YouTube で公開している。説明会をしてもその時はなかなか集まらないことも多い。ただ「30万円をくれるらしい」ではなく、「30万円は何のためにみんなの税金から配布するのか」「こういう目的なので、こういう使い方をしてください」という補助金の魂を説明することが必要では。またそれを事前に伝えることで主旨に沿わない内容を防ぎ、断れるようになる。お互いのためにもなる。石丸氏は申請の支援の役割もされるが、申請の手前で予防的に正しい方向へ導いていく補助線をつくることで、正しい方向にみんなにわかってもらうことができる。大きく手間がかかることではないので動画をつくり公開するのは大きく一考の価値があるのでは。
- 既存の補助金と今回の補助金は、何が大きく違うのか。違いが分かれば目的が分かる。
  - ⇒ 70周年ということでより町内を盛り上げたいという目的。
  - ⇒ 要項は例年とほぼ一緒に金額だけ引き上げたのか。
  - ⇒ 新たに何かを生み出すような想定ではなく、スケール感をあげるためのもの。今回は対象者に「地縁の集団」と「目的別の集団」が分かれている。それぞれに対してこういう条件だということがのせてある。
- 地域において「お金が足りない」ということは大きな問題ではないと認識している。その手前に「やろうとしているか」ということがある。やろうとしているところにお金が投入されるとギアが噛み合って回るようになる。「お金があるからできる」という思考パターンでいくと失敗する。お金を使う気にさせるところから始めていかないと。70周年記念の住民主催行事、小学校区別の懇談会などで、お金を使う気持ちにさせる（ギアをはめていく）流れが必要。70周年は言い訳であり、それをきっかけに町民が往来したり、意見交換したり、あったりすることが目的。まずは町民の意識の掘り起こしが必要。

- 予算は査定中。
- 10/10 補助は難しいのか。
  - ⇒ 1割の部分は住民にも補填してもらうことで「町の事業」という認識になるのを防ぐ。自分たちの事業だという意識を持ってもらうために。
  - ⇒ 70周年の記念(1回限りのもの)であれば10/10でもよいのではないか。

(池山氏より既存の補助金についての提案)

- 玉城町地域創生・協働のまちづくり事業補助金について。
- 現状は、不備なく申請されれば基本的には出している。20万円上限。毎年同じ団体が利用している現状もある。
- 課題として「手軽な運転資金の供給になっていないか」「協働の質は高まっているか(公と私の境界線)」「必要な団体に届いているか」など。
- 改正の視点としては、要項は変えずに運用の方法を変えていく。満額(20万円)と少額(5万円)のパターンに分けてはどうか。当初予算でシーリングしておくことが必要ではないか。また随時受け付けではなく、ちゃんと出して、審査で選ばれていただくプロセスがあった方がいいのではないか。
- これまでは事実上審査なしで交付していたが、要項に書かれている「まちづくり審査会」に外部者を入れて審査をして選んではどうか。
- 最後に報告会を実施して、満額(20万円)の場合は、必ず報告会でプレゼンをしてもらう。少額(5万円)の場合には報告書を提出し、貼りだす)優良事例が波及するようにしていく。
- 当初予算でシーリングし、満額(20万円)の場合は、随時交付ではなく例えば3月に募集をかけて4月に審査会をやって交付決定するという流れをつくる。予算に満たない場合は春と秋に2回募集をしてもよい。少額(5万円)の場合は随時受け付けも。報告会では「何に使ったのか」を町民がわかるようにする。
- 今後の改正についてどこかのタイミングで告知していう。70周年事業の交付金の報告会に既存の補助金の活用者も一緒に報告していただく。
- 7年度内に審査会を立ち上げる。審査をして適切と認めるときに交付する。
- 6年度から8年度にかけて基本的には現行の要項のまま、運用を変えていく。

(意見交換)

- 報告会では「こういう風に工夫して頑張りました」ということを共有する場であってほしい。他の団体から糾弾を受けるような場にはしてはいけない。いいか悪いかを決めるのは役場が担い、「正しい使い方」として報告会を設定する。
  - ⇒ 求めたいのは自浄作用。報告しなければいけないという意識で使っていただきたい。報告会の内容についてのブラッシュアップも石丸氏のサポートが必要になる。団体や自治区のモチベーションを上げていけるような報告会になるとよい。
- 地域活動者には補助金を使いたくない人も一定数いる。理由は、手続きが面倒くさい。金額に対する事務量が多い。志やアイデアの質に関わらず、手続きが得意なところが獲得しやすく、志があっても手続きへの苦手意識から尻込みをしてしまう団体もあるのでは。70周年記念の補助金についても同じことがいえそう。事前に見通しを立て、報告にあたる適切なサポート(報告の内容の簡略化など)があるとよい。行政が求めるクオリティと現場の地域づくりに関わる人がやれることには大きな差がある。その差をうまく埋められるようなサポートがあるとよい。
- 20万円/5万円と金額で分けるのではなく、内容で分ける方法はないか。例えば、地域の課題に継続的に取り組むのであればこちら、単発イベントであれば

- こちらなど。5万円の補助金であれば、報告書はできるだけ簡素にしてほしい。
- 報告会は楽しいものにしないと負担感しかない。お祭りにしてみんなで褒め合い、このお金使ってよかった、となってほしい。活動を自慢できる場にする。
  - 事務が増えるのは、補助金あるある。農業関係の補助金も同じことになっている。しかし農業の場合は事務してくれた人にお金が出せる仕組みになっている。そういう補助金の仕組みを考えていった方がいい。労働の対価にお金を払う文化を根付かせる必要がある。
  - 「金額規模」と「地域活動なので基本はボランティア」ということを考えると、事務を担う人にはかなり負荷がかかっている。金銭化することがなじまないジャンルではあるが検討すべき課題である。
  - 報告会はアラを指摘する場ではなく、優良事例を学ぶ、褒め合う場であるべきだと考えている。
  - 報告書の省力化は検討すべき課題。また地域支援マネージャー（石丸氏）のサポートにも期待したい。
    - ⇒ 事前説明会などは企画していきたい。地元の団体の申請へのハードルは高い。悩ましいのは70周年の3/4補助の残りの財源をどうするか。個人の持ち出しとなり、やめようとなる場合がないか。報告会で残りの1/4を奨励賞的に出すことができないか。ちゃんと活動して、報告会でやったことをPRしたら、戻ってくるという仕組みになるとよいのでは。インフルエンザのワクチンのように申請したら補助しますよというように。そうするとこちらも誘いやすい。
  - どこまで報告を簡素化するか。金額が小さいのに報告書の作成に時間をつかってもらうことのもどかしさがある。簡単な報告書。報告書のテンプレートを準備し、写真とチラシと収支など済むようなイメージにできないか。
  - 年間何件採択しているのか。
    - ⇒ 9団体程度。サポートしようと思えば手厚くサポートはできる規模。
  - 役場で確定申告のサポートをしているが、そのようなスタイルでもいいのでは。
    - ⇒ 今も実際それに近いスタイルでやっている。
    - ⇒ 5万円はフォームから入力するような形でもいいのでは。
  - 事務は極力省力化するが、事前に補助金の目的はしっかり共有していく。そうすることで正しい使い方にもっていくことができる。

### ③ 玉城町まちづくり交付金の改定について

#### ● 玉城町地域支援マネージャー石丸氏より

- 住民で実行委員会をつくる。
- 「地域とのつながりづくり」を軸に持ち、将来人材の育成を思い描いている。現状の活動者は60～70代が多く世代交代が進んでいない。団体を継続していくのではなく、活動を時代に合わせて変えながら継続していくという考え方もある。そういう思いから「アンダー50」のメンバーで実行委員会を結成し、企画や実施に向けて動き出そうとしている。
- コアなメンバーは4小学校区からを基本とし、消防団、スポーツ関係の団体、PTA、子ども会なども巻き込みながら実行委員会を結成していきたい。まちづくり会議があるので、自治区や自治会も巻き込みながら盛り上げていきたい。ゼロベースだと難しいので、いくつか選択肢を示そうと考えている。例えば、ポッチャ、カルタ大会など世代間交流につながるようなもの（どの地区でも世

代間交流、新旧住民の交流が課題として感じているため)。またやったところもやってないところも参加できる報告会を実施し、一生懸命やっているところを褒め、やっていないところを引っ張り上げるような場としたい。やったところへは継続して実施できるように話し合いの場を支援していく。

- 一般的なまちづくり協議会ではなく、「小学校区で自治会や自治区でできなくなっているイベントだけを実施する組織」をつくること理想に思い描いている。
- 課内ではその方向で進めることに決まった。目的や流れについて企画を固め次第、容認会に進めていきたい。
- 4人会では地域のキーマンに集まっていた。拡大版ワークショップではできるだけ若い人を寄せたい。ワークショップをすることで方向性は出てくるのではないかと。空論にならないように地域支援マネージャーが進めていく。

#### ④ その他事項

- 白石市を訪れ、やる気になっているところに支援をするという考えに感銘を受けた。水飲み場に馬を連れていくことはできるが、水を飲ませることはできない。地域支援では、水飲み場に連れて行こうとしているが、大事な喉が渇いている馬を探すことでは。のどが渇いている馬を見つけて連れていけば必ず飲む。どこがこういう支援を求めているかを理解できているかを知る必要がある。(池山氏)

## 令和6年度 第1回玉城町コミュニティ支援担当者会議 議事録

日時：令和6年7月22日 13:30~15:30

参加：玉城町中川、堀江、石丸 Mブリッジ中川、皇學館池山

### 1. 各プロジェクト内容及び進捗確認

#### (1) 玉城町明るい未来づくりに関する調査研究業務

##### ① 地域住民参加型ワークショップの開催

- 地域の選定…2地域（例年、玉城町から候補地を提示いただいている）
- 内容）下記の2種類のワークショップを実施。  
子どもまちあるきワークショップ ログミンのバージョンアップしたものを活用  
地域課題について考えるワークショップ
- 日程 例年11月>告知10月>選定、交渉 夏の間

##### ② 研究会の開催

- 第1回は8月15日に開催する（第2回目以降未定）
- 今年度のテーマは、集落支援員の活動について（石丸さんの方で特に意見を聴きたいテーマを絞っておく）

##### ③ UAV 活用

- ドローンを活用して、ジャンボタニシのいる田んぼをマッピングする。
  - 今年度はスキームをつくり、来年春から本格運用。
- 獣害（アライグマ、ハクビシンなどの小動物）
  - アライグマの情報がほしい（どこで出た、など）。
  - 今年は活用方法の検討なので、スキームをつくることを目指す。
  - 野良猫も載せられないか。
    - ドローンの特性上、人の頭の上を飛ばすのが難しい。人家は難しい。既にあるものではなく、入ってくるものを追いやる。

##### ④ コミュニティ支援担当者会議

- 毎月第4月曜に開催。（都度、日程を調整する）

##### ⑤ 小学校区別地域懇談会

- 下記参照。

#### (2) 地域支援マネージャー事業

##### ① 小学校区別地域懇談会について

- 開催について

- 第1回：8月26日週～9月2日週 調整中
  - 8月…26日 田丸、27日 外城田
  - 9月…2日 外城田、3日 有田
- 各回19時～予定。
- 7月25日の広報で周知する。
- 実行委員会について
  - 2月までの間に実行委員会を立ち上げる。
  - 初回のWSを8月に実施するので、実行委員会の立ち上がりは10月頃では。あくまでも住民サイドの実行委員会という立ち位置。
  - WS初回までに実行委員会立ち上げのロードマップが必要(次回会議までに作成)
- 2月初旬は新年の区長会があるのでそこに合わせるのが良い

## ② 集落の情報収集・点検

- 地区担当職員が毎月自治区に広報を届ける際に同行する(7月から)
  - 担当者が個々のタイミングで行くことが多いので、同行する場合は、あらかじめ伝えたほうが良い。何件くらい行くか、希望の地区などあれば知りたい。
  - 自治区カルテを見て、地域の絞り込みが必要。
  - 今月は情報収集だけにしてもいい。まずは特命係の担当地域、お願いしやすい人材の地域などから始めてはどうか。
  - 担当職員には「広報配布時に同行をお願いすることがあります」を伝え、実際は一本釣りで同行する。
  - 次回、手応えや見通しを報告。
- 自治区のイベントなどに足を運び情報収集

## ③ 自治区加入促進支援

- 加入促進の現状把握(転入者の窓口対応の状況など、つながりある住民と情報交換)
  - 昨年度、自治会長向けのパンフレットを作成し、配布したが、反応はない。
  - インセンティブなどを活用し、成功している事例はないか?
  - 成功事例の視察などを呼びかけてもいい。
  - 持っていきたい方向を決めてから動いた方がいい。
  - 玉城町の現状を棚卸して、2月の区長会(新しい担当者になったタイミング)で自治区の加入促進についての意見交換ができるようになるといいのでは。
  - 来月に現状を調べて報告(チラシ、窓口でどんな案内をしているかなど)

## ④ 先進自治体研修の企画・運営

- 2月(予定)に安楽島自治会(鳥羽市)に視察を予定
  - リサイクルステーションでの情報共有、子どもの防災隊など「それならうちでもできそう」という身近な成功事例を持っている地域。

- 安楽島自治会の視察時に、鳥羽市の「なかまち会」（自治会ではないが地域おこしの活動をする団体）なども組み合わせてはどうか。
- 現地へ行って、昼食を食べて帰ってくるようなイメージ。
- 研修の参加者について、もともと対象の想定はなかった。2月に行くなら、区長・特命係を対象にしてはどうか。2月に新区長に変わるので、2月下旬のタイミングがよさそう。
- いろいろな人を対象に含めてはどうか。70周年の記念委員会とか。
- 自治区系の人だけでなく、それ以外の人にも役立つ内容がいい。
- 特命係（21名）の研修も兼ねる？ 全員が参加することはないので、現実的には参加者は10名程度か。

#### ⑤ 玉城町地域つながり特命係の活動支援及び協働実施

- 地域懇談会でのテーブルファシリ or 進行サポート
- 「えんたくん」を使ったファシリ研修（2回）
  - 実施時期）8月第2週またはお盆（×8/8 石丸 NG）  
日程を複数に分けて、可能な限り100%出られるように？  
全大会（キックオフ）の中にファシリ研修を入れ込む
  - 所要時間）1時間程度
  - 内容）えんたくんを使って「特命係として何をしたいか」を60～90分で実施する
  - 参考）えんたくんを囲む人数：4（～5）人  
⇒地域懇談会の場合、昨年度よりもテーブル数増が想定される

#### ⑥ 地域コミュニティサポートデスクの設置運営

- 8月から保健福祉会館旧カフェスペース
  - 8/6～開始。並行してチラシも作成していく。
  - サポートデスクの開館時間…9:30～18:30（提案書）
  - 開館時間については、しばらくやってみて、人が多く来る時間帯だけにするなど、協議の上変更していくことができる。
  - 懇談会との兼ね合いで、9月開始に変更することも可能。
  - チラシでも時間の変更がある可能性があることを記載しては。
- 情報発信の案内も一緒に案内する（LINE、インスタ）
  - 案）玉城町のコミュニティに関する情報発信。公式LINEでは発信していないような情報を発信するLINEの公式アカウントを新規作成する。
  - 昨年度まで「ちもんけん」が運営していたインスタアカウントを引き継げないか。
  - インスタに関しては玉城町から「ちもんけん」に確認いただく。
  - 懸念点）
    - 情報発信のチャンネルとして、玉城町の公式のものがあるが、それらとの兼ね合いはどうか。公式との違い、視点やターゲットを変える必要がある。



- 今、公式 LINE が値上がりしている。費用対効果、手間コストなどを検討する必要があるのでは。
- 公式 LINE だと登録数の報告が必要になる。玉城町の公式 LINE は登録者数 3 千人。それらの登録者数を活かして、公式 LINE に情報を流すことができるようにできないか。(いちからプラットフォームをつくるのは大変)
- 理想は、情報発信をしたい人が自分で投稿できるのがよい。
- じっくり検討して、結論を急がない方がいい。引き続き検討。

## ⑦ 地域コミュニティ活動の支援

- 現状の動き
  - 【田丸】子ども非常食試食パーティ／新田町学供を使った子どもたちの居場所づくり
  - 【有田】小学校の地域学習事業（3 年生）を通じて、地域の伝統文化「獅子舞」に関心をもつきっかけづくり
  - 【外城田】むかしあそび体験イベント／おためし「防災キャンプ」
  - 【下外城田】みんなで新米を食べながら多世代交流と小さな防災意識の啓発イベント
- 懇談会から新プロジェクトをつくってほしい。
- 7 月 31 日（水）18：30～ 有田小学校で PTA 連合会があるのでぜひ同席を
- 集落支援員をサポートするような応援団がいるといいのでは。昨年度までは「ちもんけん」でマンパワーがあったが、今年度からこれまでのものを 1 人で担うのは難しい。

## ⑧ 地域コミュニティ補助金の活用支援

- 補助金の最終版を確認後、次回以降に具体的に提案する。

## ⑨ コミュニティ育成セミナーの開催

- 8 月ファシリ研修（特命係）
- 生涯現役と相談や連携セミナー
- 社協 40 周年と連携セミナー
- ファシリテーション基礎研修
- その他
  - 動画で情報発信セミナー
  - ゲームで学ぶ確定申告勉強会（フリーランスのコミュニティづくり）
  - 助成金申請のためのポイント勉強会
  - などを 2 か月に 1 回のペースで、1 年間で 4 回以上実施する
- 対象) 自治区でないグループを対象。
  - 地域のために何かしたいが思いだけではできない人をサポートする？
- 地域別懇談会の時に日程も告知できるとよい。
- どこで広報するのか？
  - 地問研のインスタ

- コミュニティ補助金の申請には、補助金セミナーへの出席が必要だということを伝える
- 筋道（コンセプト）が要る。玉城町としてコミュニティ人材の育成をする。コミュニティ人材にはこんな力が必要。そういう人材を育てたいから、こういうことをする…という講座のテーマを絡め合わせる。まずはコンセプト作りに注力してはどうか。
- 石丸の意図) まだつながっていない人同士のつながり（の広がり）をつくりたい。人材育成の一手手前、人と人がつながる一手手前。
  - つながりを目的にするなら、講座（研修）の形にするのはなぜか。
  - それも含めて、何を指すのかを明確に示した方がいい。
  - セミナーである以上、コミュニティ人材をどう育成するかという背骨がないといけない。
- 4回の解釈→4種類しないといけないわけではない。

#### ⑩ その他地域づくり活動の支援

- 情報発信（公式 LINE の活用、玉城町コミュニティ情報局、インスタ）
- デジタルの情報発信だけでなく、アナログの情報発信もできないか
  - 地域活動の募集告知掲示板 駅、役場、福祉会館、各小学校  
→掲示板期限管理者→プチ就労につなげる？
- 皇學館大学 CLL 学生に向けてメニューを示す（むかし遊びなど）
- 県南勢志摩地域活性化局『多様な人材が集う「賑わい」の維持・創出に係るネットワークづくり事業（SOU プロジェクト）』への参加
- 地域おこし協力隊と地域をつなぐような役割
- つながりや地域の現状が聞ける場があればぜひ教えてほしい

#### (3) 特命係

## 2. その他

- 全体のスケジュールの工程表を示すとわかりやすい（石丸さんが作成）
- 次回以降の会議日程
  - 8月19日（月） 13：30～15：30
  - 9月19日（木） 13：30～15：30

令和6年8月19日 13:30~15:00 (最大15:30)

作成：皇學館大学池山

参加：玉城町中川、堀江、石丸 Mブリッジ中川、皇學館池山

1) 玉城町からひとこと

玉城町のコミュニティにまつわるメンバーが集まり、よりよくしていくための話をする場。玉城町のコミュニティは特徴的である。新しく転入した人と昔から住む人との関係、人口が減っている地域への取り組みなど、これからできることについて取り組む。

2)

- 佐藤幹太@皇學館大学文学部  
愛知県出身。大学の回りの地域について知りたいと思い、CLLに参加。子ども達と触れ合えるという点が気になり、玉城町のプロジェクトに参加
- 舛田信之介@皇學館大学文学部  
静岡県浜松市出身。小学校の教員を目指しているので、コミュニティのことについて知りたいと考えている。
- 辻井健斗@鳥羽商船  
玉城町出身。玉城町のアプリをつくっている

3) アプリの説明

- 昨年度はロゲイニングのマップを簡単に作成できるアプリを作成した。
- 4つマップをつくり、自分以外のチームがつくったマップを持ってまちあるきをした。
- 今年度の変更点>Google マップのAPIだと費用がかかるので、今年度は無料で公開されている地図(オープンストリートマップ)を使用してアプリを作成した。
- 今年度は子どもたちがつくった複数のマップをまとめて閲覧できるような機能を追加予定。
- 現在地域の選定中。実施は11月後半~12月予定。

1. 各プロジェクト内容及び進捗確認

(1) 玉城町明るい未来づくりに関する調査研究業務

- ① 地域住民参加型ワークショップの開催
- ② 研究会の開催
- ③ UAV 活用
- ④ コミュニティ支援担当者会議
- ⑤ 小学校区別地域懇談会

(2) 地域支援マネージャー事業

- ① 小学校区別地域懇談会について  
4小学校区それぞれで対話の場をつくる
  - 参加者について  
外城田 (34) : 出席 7 / 欠席 1  
田丸 (54) : 出席 13 / 欠席 15  
有田 (32) : 出席 8 / 欠席 4  
下外城田 (28) : 出席 8 / 欠席 3  
※WEB or 電話で出欠確認をしている
  - 名称の確認  
地域まちづくり会議 (小学校区別地域懇談会)
  - プログラム案 (60分程度)
    - ① ごあいさつ (5分) 町長から

- ② 進め方 (10分)
- ③ 地域まちづくり会議とは (昨年の経過説明) (5分)
- ④ 自己紹介 10分
- ⑤ テーマ:玉城町誕生 70周年に向けて「地域でできること・やってみたいこと」(25分)

⑥ 池山皇學館大学准教授よりひとこと (5分)

- ①のあいさつは町長。②と③は石丸から説明する。グループワークは④から。
- ③と④のあいだで池山さんからフォローがあるといい。去年までの取り組みについてひとこと。
- 懸念点は、③のなかで今後の事業についていろいろ質問(去年からの連動性など)が出てくるのが想定される。それを受け入れた方がいいのではないか。
- 昨年度のまちづくり会議は有志が集まった作戦会議だったが、地域住民から「区長がなぜこないのか」などの意見もあった。(特に有田地区で区長の関わり。地域によっても区長全然違う)趣旨に誤解があるかもしれない。認識を共有するためのとめなおしが必要。⇒③と④の間に池山さんからコメントを入れていただく。
- 体育館、マイクでは指示が伝わりにくい。説明が届かなくてもやるのがわかるようにしておいた方がいい(資料、掲示など)
- 「70周年に向けて」というテーマで意見がでてくるか。具体的な問いかけにした方がいい。例えば「70周年にあたり、70個行事をする。そのうちの5つを考える」など。「やってみたいこと」では一足飛びすぎる。
- 仮に「やりたいこと」が上がってきても、それがそのままできるわけではない。②③あたりで受け皿の説明も必要。
- 1グループ4~5人程度、特命係 グループ分けは属性をばらける。性別が偏らないように。

• 実行委員会について

- 2025年の博覧会(70周年)の実行委員会のタイムテーブルをつくる
- 次回のまちづくり会議(2月)のまでに実行委員会が立ち上がり、実行委員会の会合があり、その内容について次回のまちづくり会議で共有できるように
- 公式ではなく「70周年記念行事住民実行委員会」のようなイメージ
- 住民中心で「やりたい」という人を見つける。
- コミュニティスクールにリクルートしにいくのはいいのでは。(学校区で何かやろうという動ききもある)
- 特命係はあくまで伴走、フォローの立場。
- 博覧会の本体は10月として、それ以外の時期にやったイベントも博覧会と位置付けてもいいのではないか。各イベントをスタンプラリー化し、全部ひっくめて博覧会にしてはどうか。博覧会を表すパーツをつくり、チラシ等にロゴマークや必ずこの説明文を入れてください、という建付けにしては。何かメリットがあるとよい。パーツがついていたら、必ず広報に載る、補助金(3万円)がもらえるなど)。
- 住民が主催する記念行事を10月に実施したい。住民が実施する記念行事を実施する実行委員会が必要。⇒懇談会でも伝えるし、正式には役場が公募をかける。(実行委員会の要項が必要になる)
- 70周年の記念式典(公式)はする。その中で「町民主権」の部分がある。それは町民主権の部分は、委託をするかたちになる。あくまでも住民がつくるということが大事。完全に町民有志というかたちは難しいので、何か『傘』がいる。役場がお墨付きをつけるが、「委託」なので実行委員会が主体的に実施する。
- まちづくりの補助金(20万円)を活用してはどうか。
- あくまで「住民がつくる」が大切。町は「お金を出して口を出さない」というスタンスがベスト。公式ロゴをつくるのは町の役割、内容を考えるのは実行委員会

などの役割分担。

- 久しぶりに「100人委員会」を出す？
- これまで20万円の補助金を活用していた精力的な団体を呼ぶのはどうか。その人たちから広げてもらった方が、アイデアは良いものが出そう。しかし、あまり若者寄りになっていいのか。
- 1つの団体ではなく、10個の団体にそれぞれイベントをしてもらうなど？
- ミナテラスキャンプと区長会はレイヤーが2層になっている。それらの橋渡しが必要。⇒次回のまちづくり会議で「実行委員会」から内容を伝えられるとよい？（そのためには公式な後ろ盾が必要になるのでは）
- 活動する人が活動しやすいようにつないでいく⇒集落支援員、特命系の役割。
- 今回の懇談会では「2025年の博覧会はしたい。現在準備中。参加した人にはぜひ参画いただいて、プロジェクトの一端を担ってほしい。詳細は後日」という伝え方がいいのでは。
- それらをふまえて「テーマ」の修正と「出口の説明（2025年の博覧会）」が必要
- 当日の特命系の参加について。任命式の終了後、参加してもらう方向でまちづくり推進課から投げかけてもらう。

## ② 集落の情報収集・点検

- 69自治区の現状把握のために情報収集・点検。毎月広報紙を各区の区長に役場の地区担当職員が持っていく。その時に同行をさせてもらう。
- 7月同行の結果  
1か所の区長と会うことができたが、あいさつ程度の事務的なものだった。
- 8月以降  
同行はさせてもらうが、集落支援員の紹介のチラシを渡すようにする。
- 連絡先に携帯番号は大丈夫？プリペイド式にしては？

## ③ 自治区加入促進支援

- 住民窓口の対応内容  
ゴミ出し・タマネー・住民票などがマイナンバーでコンビニ交付できる案内・防災無線の申込み・自治区への加入案内などをまとめたものを封筒で渡す。受け取った人が自分から自治区の会長に連絡するかたちになっている。
- どうしていくかを石丸さんの方で検討する。

## ④ 先進自治体研修の企画・運営

行き先の候補>鳥羽市安楽島

- 9/22 浅見氏来訪に同行、先方に依頼
- 実施は2月開催予定。新しい区長会と絡めるべきか。  
⇒2月の開催であれば、新しい区長になっているので問題はない。
- 実施場所も安楽島で問題ない。

## ⑤ 玉城町地域つながり特命系の活動支援及び協働実施

- 8/1からの任命。
- 特命系の研修（8/13）は実施済。（8/21にも実施する）
- 小学校区をベースにイベントの企画をする際などにサポートできることをしていく。

## ⑥ 地域コミュニティサポートデスクの設置運営

- 9月から開始予定。玉城町でおこなわれる地域コミュニティ活動に関する相談会。毎週火曜日。保健福祉会館の旧カフェスペースで実施。
- 現在、チラシを作成中。

- サポートデスクに関する問合せ先の表記が現在役場になっている。答えられることは役場でも対応するが、予約等の対応はどうするか。
  - 予約については、聞いておいてもらって、折り返しする。問い合わせ先の対応時間を明記しておくとのよいのでは。
  - 行政相談のような固い雰囲気がある。イラストや写真を入れるなど「相談してみたいな」と思ってもらえるような楽しさが伝わるチラシにしてはどうか。(今後のバージョンアップの時でも OK)
- 役場で印刷していただける。

#### ⑦ 地域コミュニティ活動の支援

- 去年のまちづくり会議から各小学校区で動いているまちづくりの取り組みなど、各地域団体の必要に応じた支援を行っている。
- 下外城田では、9/7 に新米を食べよう」というイベントを実施する予定。明日、下外城田のまちづくり会議があり当日に向けた準備物の最終確認などをする予定。
- 有田では、11/3 の文化祭で獅子舞を披露する。その後、小学校3年生を対象とした地域学習で実演も兼ねて獅子舞の説明を行い、興味を持ってもらって、2/23 の本番に見に行ってもらえるようにしたい。
- 昨年度まで地域問題研究所が運用していたインスタアカウントへのログインはできるようになった。アメブロもあるが、使うかどうかは今後検証して決めていきたい。(有料のドメイン?)

#### ⑧ 地域コミュニティ補助金の活用支援

- まちづくり補助金として地域活動に使える補助金がある。
- 昨年案のかたちを今後も継続するか検討している状況。
- 今年度はいったん7月末で募集をとめ、予算のとりなおし、査定をしている。
- 新しいものに切り替えようと、来年度に向けて課内で検討している。
- 全部網羅しようとして、複雑なものになっている印象。最短で来春の実施に向けて、12月に予算査定にのせるために、もう少しシンプルにすることを検討できないか。可能なら最終案を見せてほしい、一緒に検討したいと個人的には思っている。(池山先生より)
- 堀江さんに「最終案」があるかどうかを課内で確認いただく。
- 新しい補助金の切り替えをして4月からスタートを切れそうか?
  - もう少ししっかりまとめないといけないという状態。
  - 今年の4月に申請があったものは、書類さえ問題なければ申請は通っている。
  - 来年度も4月からスタートする方向で検討している。

#### ⑨ コミュニティ育成セミナーの開催

- 自主防災組織・地域活動の勉強会(案)について。
- 10/21(月)にキックオフをしたい。テーマは「防災×地域づくり」。講師は浅見雅之氏。南海トラフなど全国的に地震への危機感が高まっているなかでこのテーマを設定。
- 一般の方に加え、区長にも案内をする。
- 午前中に研究会、夜にキックオフセミナーを予定している。
- キックオフをふまえて、地域の自主防災を考えていくきっかけになれば。
- セミナーは全4回開催予定。各回のテーマは、前半の1・2回を防災関係、後半3・4回は住民主体で70周年に向けてやってみたいイベント等の検討(まちづくり会議とは別立て)を想定。第4回目に補助金申請に向けた流れをつくりたい。
- 第1回目のセミナーのテーマは「東日本大震災から学ぶ防災、地域づくり」。2回目は町内の自主防災会の現状、事例紹介、自主防災を担当されている西岡さんにも町の現状を話していただき、情報交換や考え合う場にできれば。

- 第3回目は、70周年に向けて自分でやってみたいイベントの企画研修。地域人材育成の視点から。第4回目はまちづくり補助金の活用講座。補助金をつかいながら活動をスタートさせる後押しをする。

⑩ その他地域づくり活動の支援

- 皇學館大学 CLL 活動について
- 舩田) 9/2.3 まちづくりの会議、9/7 防災の活動に参加予定。
- 佐藤) 8/26.27 のまちづくり会議、9/7 の防災の活動に参加予定。

令和6年9月19日 13:30~15:00 (最大15:30)

参加：玉城町中川、堀江、石丸 Mブリッジ中川、皇學館池山

(1) 玉城町役場から

台風で延期になっていたまちづくり会議が本格的に始まる。また70周年記念実行委員会も動き始める。よろしくお願いします。

(2) 玉城町明るい未来づくりに関する調査研究業務

① UAV活用

- ジャンボタニシについて、生息状況の見える化をして、住民が一丸となって取り組まなければいけない。
- ドローンで撮影し、画像処理を行い、ジャンボタニシの卵を見つけてそれを地図に落とし込む。その情報を地域に渡して駆除をお願いする。
- 高い高度でスキャンし、航空写真(オルソ画像)をつくる。GIS(地理情報ソフト)上に読み込み、ヒートマップのようなものをつくり、スクミリングガイが多い場所を伝える。
- 今年度は玉城町の野籾地区でしている。
- ドローンは20-30mの低い高度で撮影ができる。すぐに撮ることができる。歯抜けになっているところがジャンボタニシの食害にあったところだとわかる。上空からみて卵が見つけられる。画像診断して、位置情報を取得する。
- タニシの卵のある部分とそれ以外の部分の2色の画像を作成する。個体数に応じて色を変更するとヒートマップのようになる。多いところは赤色を濃くするなどして見やすくする。
- 玉城町では既に稲刈りが終わったが、タニシは土の中で越冬する。ジャンボタニシの卵の多い場所は冬の間コンバインなどで土を起し、卵を土の上に出すことで駆除できる。
- 水路を經由して広がる可能性があるので、情報共有して広がりを抑える。
- ジャンボタニシは寒くなると死ぬので、表面に出して越冬させないようにする。
- 現状での課題。気象条件が整わないと撮影できない。PCのスペックが必要。現状は食害が発生したうえで、卵がないと発見できない。今後は株が細い時期に成員を探すことを検討したい。現実の駆除にどれくらいつなげられるかは未知数。
- 画像を可視化するとき拾っていくのは自動で見えるのか？ピンク色の卵を抜き出すのは自動でできるのか？
  - 自動でできる。
- ピンク色の卵を検出するとき、その精度はどれくらいなのか？
  - ドローンの高度にもよるが、ちゃんとピンク色じゃないと取れない場合もある。100%ではない。できるだけ多くとれるように調整している。ドローンの写真は何枚もとるので精度はあげられる。GISデータで示す時は個数の話はしない。濃度が出るだけ。
- 3月に田をおこして、水を入れて代掻きをする。水は濁っている状態だが、植える前に何かできることはいか？
  - 代掻き中にはごっている状態は厳しいが、水が澄んだ時に上から撮ることは可能(成員か稚貝か不明)。ドローン撮影について、実証実験をしていきたい。そのためにドローンをとばすことに理解がほしい。水上と水下にタニシが多い。代掻きのとき上がってきたわらと重なると見えにくくなるかもしれない。
- 農協がジャンボタニシ捕獲カゴを配布していた。それも有効に使ってほしい。田んぼの中から見つけるのは大変なので、ある程度多い場所が示せたらよいのではないか。



(3) 地域支援マネージャー事業

① 小学校区別地域懇談会について

- 参加者について  
9/24 田丸 26人 ※うち2人は公募(未定4人) 特命係2人  
9/25 下外城田 17人 ※うち1人公募(未連絡7人) 特命係5人  
9/27 外城田 特命係3人  
10/4 有田 特命係5人
- 町長、副町長、教育長が4回とも出席予定。
- 当初、特命係が周囲を歩き回ってもらう予定だったが、グループ内に入ってもらい、書き役としてはいってもらいたい。
- 特命係は、中に入って出てきた意見を書き留めてもらう役割。直接住民の方の意見を聴いていただける。研修会の際にはそのことを伝えていないので、あらかじめ話をしておいたほうがよい。
- 石丸が準備物などを記した実施要項をつくり、コメントをもらう段取りを進める。LINEのグループになげる。

② 集落の情報収集・点検

- 八月は台風の動向などがあり、同行が難しかった。
- 地域集落カルテに目を通して、課題の仮説を検証している。
- 今後回る時に集落の資料を添えながら置いてきたい。
- 石丸さんから行きたい自治区をピックアップして伝えるのがよいのでは。
- 全ての自治区を回るとは難しいので、濃淡をつけて、協力してくれそうなところ、課題の深そうなところをピックアップしてリクエストしてはどうか。
- 今月は25日(水)に回る予定。職員によって渡しにいく時間がバラバラ(勤務中に行く場合も、帰りに寄る場合も)。予定が重なると行けない場合もあるので、複数示せるとよい。
- 田丸の林さんがまちづくり会議に出席予定。まちづくり会議のときにアプローチしてみてもどうか。

③ 自治区加入促進支援

- 前回、税務住民課からの対応を共有いただいた。
- 地域支援マネージャーのチラシを配布し、地域の困りごとの相談を石丸さんが受ける形を考えていたが、役場の中の住民相談の窓口(税務住民課)と窓口が2つになると混乱するかもしれない。実際、税務住民課は住民相談の窓口になっているのか?  
➤ よくわからない質問は税務住民課で聞かれることが多い。転入者に向けて暮らしの困りごとが連絡できるプラットフォームをつくることは、役場のなかで混乱を招くかどうかを相談させてほしい。

④ 先進自治体研修の企画・運営

- 二月に安楽島自治会を予定。9/22に安楽島の活動の状況を一緒に同行させてもらう。

⑤ 玉城町地域つながり特命係の活動支援及び協働実施

- 8/13,21に活動をした。活動の不安を話しながら研修をした。まちづくり会議でお願いしたいことを伝えた。グループに入ることをネガティブに感じる可能性もあるので、職員への要望・陳情にならないことを伝えたいうえで安心して参加してもらいたい。
- 予算の計上などが動き出すタイミングで、関わっていききたい。

⑥ 地域コミュニティサポートデスクの設置運営

- 9/3から毎週火曜日、石丸が在席し、予約があれば対応する。
- お越しいただいた方…局長、福本さん、河合さん(下田辺、高齢)

- 相談記録について。フォーマットをつくって紙ベースでおいておくといい。後日あの時相談したけど…という人が出てくるかもしれない。
- ⑦ 地域コミュニティ活動の支援
- 9/7 は報告書を作成中。今後は、獅子舞のイベントで獅子舞を披露する有田は終了。下外城田は文化祭で終了。
  - 今後の動きをどうするか？（役場側はひく。石丸さんは活動を見届ける…など）
    - 引き際はかなり難しい。新米イベントはどこへ向かうか？ 目指したいの地域のつながり作りや多世代交流。もとは下外城田の120周年に向けてのイベントだったのでは。
    - 基本的には住民の自主的な動きなので、支援する側としては、「どういうところがスタートか？」を問いかけるなどの関わり方がよいのでは。支援者がどっぷり手伝うと相手が甘える。終わったから終わり、も違う「これをして、どこへ向かうのか？」ということを導いていく。だんだん関わりを減らしながら手を引いていく、ファシリテーター的な関わりに持っていくのがいいのでは。プレイヤーとして一緒に椅子を運びましょう、ではなく。石丸さんも当日フラッといくようなかたちにできるとよい。ふり返りのときに、どこへ向かっていくか？を確認していくファシリテーター的な支援をしていけるとよい。
  - 役場としては、三人以上の団体など形がないと支援のしようがない。補助はできるけど、芯にはなりたくない、という人たちではできない。団体をつくって終わりではないが、団体のような形にならないか。役場としては“規約”がほしい。プロジェクトのアドバイスの際に、規約をつくることを目的にするとよくないが、向こう側にやりたいことがあって、そこへ行くために規約が必要だと理解してもらおう。住民側は中長期の目線で活動を見通せていないので、見通しができるようにしてあげるとよいのでは。
  - 手伝ってもらったらできる、という人を育成するのがコミュニティ育成セミナーや視察にあたる。組織の自立度をABCで測り、できていること、できていないことを測るという方法もよいのでは。（自分たちで会議を開いて決めていける、などのチェック）
- ⑧ 地域コミュニティ補助金の活用支援
- 20万円のまちづくり補助金を見直さないといけない。住民には何も共有していない。
  - 昨年、地域問題研究所が考えたたたき台はあるが、複雑な印象。これとは違うかたちでたたき台を考えた方がいいのか？
    - それでもよい。まちづくり補助金を使った人と一緒に考えるなどのプロセスがあってもよさそう。20万円にかわる新しい補助金のかたちはまだ決まっていない。改めて池山先生と石丸さんが提案する。先進的な事例をいくつか紹介するなども。
  - 今後、補助金については意見交換しながら考えていく。
  - 昨年度作成したたたき台がとまっていることについて、分何が壁だったのか教えてほしい。
- ⑨ コミュニティ育成セミナーの開催
- 10/21 夜に浅見さんのセミナー。25日発送にむけてチラシを作成している。浅見さんのセミナーをふまえて、自主防災組織・地域活動の勉強会を企画している。
  - 3・4回目は補助金に向けた内容にしたい。補助金の仕組みも合わせて2ステップで。
  - 全4回のスケジュールなどを可視化する。
  - 10/21 準備 17:00～、講座 19:00～（1時間半）、片付け 20:30-21:00
- ⑩ その他地域づくり活動の支援
- 石丸さんが皇學館大学の授業で、人材育成のテーマで11月に登壇する。中川課長に依頼したうえで、地域支援マネージャーとして登壇予定。

1. 各プロジェクト内容及び進捗確認

(1) 玉城町明るい未来づくりに関する調査研究業務

- ワークショップ開催の場所の検討について。年内に2回ワークショップをやりたい。野篠か勝田が候補か。下田辺の子ども会からも実施したいという声がある。
- 下田辺の子ども会では「身の回りの危険個所を探す」という方向性のテーマを考えている。
- 候補日は12/14,21,22を想定。
- 野篠がまつりをやろうとしているので、それと合体して実施する案もある。
- TMKプロジェクトは着々と進んでいる。

(2) 地域支援マネージャー事業

① 小学校区別地域懇談会について

- 9月末~10月頭にかけて4小学校区で無事終了している。
- 町で暮らす満足度、得票があった意見などをまとめている。
- 来年度秋頃の70周年イベントに実施に向けた実行委員会の立ち上げを進めている。
- 実行委員会については明確なスケジュールを決めた方がよい。最初は役場も同席する。11/15までには1回目を実施したい(11/4の週。遅くても11/15までには開催)。
- メンバー(候補)に頼むためには「何をするのか」という説明資料が必要になる。説明資料は詳細を提示するのは難しいので、最初は「その気になる」を目的とする。まずは集まってもらう人を石丸氏がリストアップする(10月中)。

② 集落の情報収集・点検

- 茶屋区、勝田町の区長に意見交換の機会を依頼している
  - 茶屋区:「アンケートなど住民の意見を聴きたい」という声があるらしい。まだ石丸氏と直接会話はしていないので、会う機会を設定する。早く動く必要がある。もともと熱心な地域。
  - 勝田町:サポートデスクに来訪。人(役員のなり手)とお金の現状(課題)について悩まれている。ギリギリ固定費を払える状況で、役員手当などをカットしている。「防災に力を入れたい」「将来をみんなで考えたい」などの思いがある。区長が1人で考えようとしているので、住民と一緒に話し合える場の手伝いを提案。来年度も区長を担われる予定なので、じっくり伴走していったらどうか。広報を役場に取りに来てもらっているので、その時に話を聴く機会を設定してもよいのでは。

③ 自治区加入促進支援

- 地域コミュニティや近所づきあいなど個々の悩みは、サポートデスクに来てもらうよ

うに案内する。自治区に入っていない人は相談窓口がない。

- 住民課とじっくり意見交換して「仕事を増やす」のではなく、サポートデスクが「味方であること」を伝えた方がよい。
  - 区長会で自治区の加入促進が要だということを事前にインプットしておくとうよさそう。
  - 転入者にも「新規加入を受け入れていない区」は案内していない。受け入れしていない区も把握しておくことが必要。
  - 「新規加入を受け付けない」は区長の個人的な思いとは別のところにある。区長自身は「入れても良い」と思っているが年長者が反対したり、野籐のように10万円が必要になったり。区長自身の想いと全体の想いのギャップがある。新しい時代に合わせていけないといけない部分である。話し合い支援が必要な部分ではないか。
  - 自治区の加入がうまくいっていない部分に話し合い支援をすることを打ち出してはどうか。雰囲気をつくっていくと。
- ④ 先進自治体研修の企画・運営
- 2月の役場の予定を確認中（日程を決めて先方に打診）
  - 2月初旬の区長会で案内がしたい。2月の下旬がよい。
- ⑤ 玉城町地域つながり特命系の活動支援及び協働実施
- 70周年記念まちづくり事業の実行委員会への働きかけ
  - ミーティングの情報提供依頼
  - 特命係に事業計画と予算の提出を求めている。それぞれの学校区のことを知るためにも一度全体が集う場を設定する予定。日程は役場が決める。
  - 特命の進捗状況はどうやって把握しているのか。
    - ログチャットで把握している。（石丸氏の参加可否調整中）
  - 今年度予算は100万円。今年の残りを来年度に繰り越せるよう検討中。
- ⑥ 地域コミュニティサポートデスクの設置運営
- 田丸駅の掲示板へにチラシを掲示。
  - 実施日、相談件数、特筆すべき相談をピックアップして報告する。
- ⑦ 地域コミュニティ活動の支援
- 昨年のまちづくり会議からの支援が中心となっている。
  - 有田)文化祭での獅子舞の実施に向けて、どこの区が何を舞うか詳細も決まってきた。小学校への地域学習については打合せに同席する予定。
  - 下外城田) 世代間交流、地域のつながりづくりを軸にボッチャを実施予定。当日、下外城田神社で子どもたちが参加する行事があるので、ボッチャ終了後にそれを見に行く案が出ている。新米イベントのときもそうだったが「団体」の必要性を実感しているので、現在会則を作成しており、団体設立に向けて動き出している。
    - 現在は介入しすぎではないか。どこかのタイミングで地域の自立を促してほしい。
    - イベントが一度白紙になって立ち直ってから、石丸氏におんぶにだっこの状態になっている。今、自立の目が出たところ。
  - 援助の手をいつ離すかは難しいが、離すことを前提にして関わっていくことが大事で

はないか。少しずつ匂わせていく。つかず離れずの関係性をつくっていく。時々休みながら、長い目で関わっていいのがよさそう。

- 団体をつくったからやりたいことができるというわけでもない。
- コミュニティスクールの状況が知りたい。学校運営協議会に地域支援マネージャーをオブザーバーに入れてもらうことはできないか。そこに片足を置いておくと、その後の話も進みやすくなるのでは。

#### ⑧ 地域コミュニティ補助金の活用支援

- 玉城町地方創生・協働のまちづくり補助金改正について。
- 現状のふり返り
  - 通常業務の中の手軽な運転資金になっていないか。協働の質が高まっているか。必要な団体に届いているか。
  - 現在補助金は20万円。随時受付、随時交付。事実上審査なし。報告書類の提出が義務付けられている。
- 改正案
  - 現行の満額交付（春季・秋季）と5万円程度（随時）の少額に分けて交付
  - 当初予算にてシーリング
  - 正しく使っていただける場所に補助金を出していくために、まちづくり審査会（外部者）を設定して審査する
  - 報告会での報告（満額）。報告書の掲示（少額）。
  - 3月中旬に募集（年度をいっばいつかってもらうために）
  - 4月初旬に審査会、5月には交付決定。8月に秋季募集し、9～10月で審査会・交付決定。
  - 当初予算200万円の場合、80万/80万を春秋で分け、残り40万円を少額交付分に振り分ける。
  - 要綱については基本的に変更不要。
  - 審査会は3人くらい（学識、市民活動が分かる人、住民など）のイメージ。入口の審査会、出口の報告会で透明性を担保していく。
  - 7年度は交付団体の報告会の参加義務付けする。年度内に審査会を立ち上げる。
  - ポイント・懸念点
    - 現行制度を維持しながら、より協働・活動の質を高める
    - 現行要綱内の「まちづくり審査会」を立ち上げる
    - 報告会の参加義務付けに関して要綱改正の必要性はあるか
- 現実的な案としてまとめていただきありがたい。7年度からこの状態でできるのではないか。ただいきなり変わるので周知が行き届くか。（これまで随時出せたのが春季と秋季に限られるので）それがクリアできればできそう。
- 継続的に補助を受けられるのは3年間までとしている。4年目の事業も継続性のあるものは補助できれば。他市でも同じ課題があり、審査項目に「新規性」を加え、1.2倍で加点することにした。新しい取り組みだけでなく、既存の取り組みの中にも新しい

視点を加えていればOKとしている。

- 継続的に補助を受けるところは、金額を減らして交付することも検討できないか。現行の要項は修正が必要になりそうだが「予算の範囲内で調整する」などの一文を入れれば可能になる。要項に違反はしていない。
- 審査には新規性を入れたうえで、要綱には「(長く補助が続いたものには) 予算の範囲内で調整する」という文面も添え、必ずしも満額出さないというニュアンスをいれれば違反にはならない。
- 募集要領は各10点などが載っている。審査員の見る審査要領では各項目に0.9、1.2などの傾斜配分が載っている。審査要領をどこまで公開するか。
- 7年度に審査会を立ち上げ、8年度に審査を行う。もう1案としては、7年度は審査員に(審査には関わらないが) 審査員がコメントを返すなどもできる。
- 審査員イメージは、皇學館大学教員、津市NPOサポートセンターの川北氏、もう1人(町民など)。(今年度も関わってもらうならアドバイザー契約などをしてはどうか)
- 報告会に人は来るのか。各団体から2名程度で16名。プラス他の人。うまく回り始めたらこの補助金を受けたい人に参加しにきてもらえるとよい。
- 募集は手前でもよい。2月1日に募集して、3月に審査を終え、採択は決定するが、交付決定は4月1日とする。募集期間が早くなると報告会のタイミングが早くなる。
- 来年度から春季・秋季に分けてもよい。7年度は70周年の限定の補助金もある。
- 70周年でより質の高い協働を目指すなら、7年度から始めた方がいいのでは。
  - 70周年でかたちを示して、これから変えていくことを示すのがよいのでは。
  - 7年度はひとまずこのスキームで行く。アドバイザーに申請書を見てアドバイスをもらうことは開始してもいいのでは。
  - 審査員は、7年度は採否には関わらないが、実施に向けたアドバイスをいただく。審査会を立てて、委員に来てもらって、それをアドバイスとする。
  - 今年度は要領のたたき台をつくり、その視点で審査のイメージを持ってもらう。それを次年度以降に活かす。
  - 採択団体には7年度から報告会への出席を義務付けする。

#### ⑨ コミュニティ育成セミナーの開催

- 70周年記念のイベントをつくることを働きかけるような講座を開催する。
- 単発ではなく連続性を持たそうとしている。
- 2回×2セット。テーマは「企画のつくり方」「補助金申請の勉強会」。講師は石丸氏がする。
- 次回までに詳細を報告できるようにする。
- まちづくり補助金の申請時に必ず石丸氏を通してもらうようにすることもできる。(ブラッシュアップ、作成指導)
- 玉城町の人に向けて実施するので、町外のさまざまな補助金を獲得するのは階段の3段目くらいのイメージ。まずはハードルを低くして「魅力的なプレゼン」などをテーマにした方がいいのでは。

⑩ その他地域づくり活動の支援

- 田丸駅にサポートデスクの情報の掲示をさせてもらっている。
- 皇學館大学の授業で地域人材の育成のテーマで登壇する（11月22日）

令和6年11月27日 9:30~11:30

1. 各プロジェクト内容及び進捗確認

(1) 玉城町明るい未来づくりに関する調査研究業務

① 地域住民参加型ワークショップの開催

- 12月初旬に打合せを実施する。
- 12/14 ワークショップでは、授業と重なっているため学生が2名途中で抜ける予定。
- 参加が7人。

(2) 地域支援マネージャー事業

① 小学校区別地域まちづくり会議について

- 12/6での区長会での資料を作成中。まちづくり会議のお礼、意見のまとめを報告。
  - 報告内容) 地域支援マネージャーの紹介、まちづくり会議のお礼と報告。参加されていない区長にも内容が分かるように。まちづくり会議の報告内容としては、各地域の満足度や全体の意見など。70周年記念事業、サポートデスク、先進自治体の視察についても伝える。
  - 「満足度」は「何の満足度」か分からないので、補足を入れておくとよい。違う言葉(やわらかい単語)に変更するのもよいのでは。資料では、ワークショップのときに聞いた言葉(→「玉城町暮らし満足度」)で伝えるのがよい。口頭の説明で低い数字のところにも「数字は低いがこんなよいこともある」などフォローができるとうい。
  - 当日の発表時間は10分程度。今回はそれぞれの学校区の事業報告がメインとした方がよい。
  - 新しい区長に引き継いでいってほしいことを明確に伝える(例:サポートデスク、70周年記念事業など)
- 集落カルテのアップデートをするために各地区に可能な範囲でヒアリングにまわる
- 11/29にオンラインにて70周年記念事業(地域イベント)についての意見交換。方向性も含めてお知恵を拝借する。

② 集落の情報収集・点検

- 集落カルテとの齟齬があった。(茶屋区の区長から加入率「95%」と聞いたが、カルテでは「75%」だった)
- 各区のヒアリングをしながら、カルテのアップデートをして把握していきたい。
- 茶屋、勝田町の区長にヒアリングをした。  
(茶屋) 自主防災会の周知への不安。12/7の山の神で人が集まる機会に伝えてはどう



かと提案した。

(勝田町) 役員のなり手、お金(区費)の現状から5年後、10年後の自治区存続に不安を抱えている。年明けの役員会に同席。

- 今後の区長会で集落カルテをもとにヒアリング回ることを案内しようと考えている。
- 集落を回る際には戦略を練る必要がある。農業集落はガードがかたい。特に1年で区長が変わるので、変わっても続く仕組みを考えていかないと。
- 全てをまんべんなく回ることにはできないので、集落カルテの未加入率が高いところから回っていくのはどうか。ピックアップする地域の説明ができるとよい。その根拠として集落カルテの未加入率が高いところを狙う。数字では未加入率が高いが実際の質はどうかをヒアリングする。加入率の平均をとり、平均点以下のところに出向くなど。

### ③ 自治区加入促進支援

- 区長会で自治区加入のリーフレットのデータを渡す予定。そのデータの作成は総務政策課になっているが、PDFデータなので編集できないので、元データを問い合わせ中。

### ④ 先進自治体研修の企画・運営

- 12月の区長会で日程を案内する。新区長への引き継ぎをお願いする。
- 1月の広報、2月の区長会で告知する予定。
- 安楽島朝市・リサイクルステーションの見学、まちあるき・散策、意見交換会で取り組み(有志団体「どーどい」の活動)を紹介いただく予定。
- 町バスの手配も進めていく。日程確保が最優先。

### ⑤ 玉城町地域つながり特命系の活動支援及び協働実施

- 現状は実質動けていない。
- ログチャットに入ることはできるが、職員のグループには入れない。そのため日々の特命の活動を見ることはできないなどいろいろな制約がある。またファイルの共有などをしようとするログチャットでは不便かもしれない。LINE やスラックなど別の方法がよいのでは。または堀江さんのPCを確認に行くなど。
- 特命全体のグループがあり、小学校区ごとに4つのグループがある。個々の小学校区のグループにはまちづくり推進課の職員は入っていない。各職員との会話から把握している状態。
- まずログチャットで各小学校区のリーダーと石丸氏のグループをつくってはどうか。リーダーと石丸氏のつながりをつくる。
- 各リーダーには企画の実施のなかで地域支援マネージャーに手伝ってもらえることを周知していく。

### ⑥ 地域コミュニティサポートデスクの設置運営

- 9月からスタート。14回実施。相談は9件。

- 相談内容は、社協 40 周年について（局長）、区の実情のヒアリング（勝田町）など。
- 規約の認識の相違があり、区を抜けたという相談を受けた。（新出町）
  - 区のヒアリングをするときは気を付けた方がいい。不服を持っている特定の人の味方をするとはよくない。何かの機会にさりげなく聞き出せるように。

#### ⑦ 地域コミュニティ活動の支援

- （有田）11/2 文化祭で獅子舞を披露した。小学校 3 年生の地域学習が延期になった。
- （下外城田）団体設立に向けて会則、名簿作成をしている。自立へ向けて自走できるように支援している。
- コミュニティスクールの協議会に地域支援マネージャーがオブザーバーとして関われるかどうかについては調整中。

#### ⑧ 地域コミュニティ補助金の活用支援

- 課長が在席しているときに改めて確認させていただく。

#### ⑨ コミュニティ育成セミナーの開催

- 住民の活動などにおける課題から下記の 2 つの講座を企画
  - ①「伝える」から「伝わる」コミュニケーション講座
  - ②「意見を引き出す」ファシリテーション講座
- 当初は 4 回を想定していたが、回数を変更することは可能か。
  - 10 月に企画したがうまく庁舎内の調整がとれず断念したことなどを加味し、町と早急に相談する必要がある。

#### ⑩ その他地域づくり活動の支援

- 11/22 に皇學館大学で授業（伊勢島定住自立圏共生学Ⅱ）

### （3）その他

- （報告資料の形式について）
  - 今月の活動報告内容のボリュームと進捗がパッとわかるものがあるとありがたい。それを積み重ねると年間報告になる。
  - 集落支援員の報告書は？ ⇒ 月末に日報的なものを提出している。
  - 現在の資料は、どれが先月でどれが今月か分からない。今月したものと、先月したものが分かりやすいとよい。時系列で整理するか、事業ごとに整理するか。現在は後者である。例えば①に対して今月何をしたかというのが分かるとよい。

1. 各プロジェクト内容及び進捗確認

(1) 玉城町明るい未来づくりに関する調査研究業務

- ① 地域住民参加型ワークショップの開催
- ② 研究会の開催
- ③ UAV 活用
- ④ コミュニティ支援担当者会議
- ⑤ 小学校区別地域懇談会

こちらについては改めて堀江さんに時間をとっていただく

(2) 地域支援マネージャー事業

① 小学校区別地域懇談会について

- 12/6 区長会で地域まちづくり会議の報告をした。お礼と意見のまとめを伝えた。70周年に向けた協力をお願い。サポートデスクの案内もした。
- 11/29 に 70 周年記念事業についての意見交換会をオンラインで実施した。実行委員会の一手手前。ふれあい農園の野口さん、tsumugu kitchen の榎原さん、山本ふゆかさんの3名。ゴールや目的を明確にしてほしいという意見を頂いた。
  - 以降は実行委員会の実施に向けて動いていく。町長の意見からも区の参画を推進していく。
- 下外城田のコミュニティスクールの話は、明日教育委員会に出向くことになった。

② 集落の情報収集・点検

- 集落カルテのアップデートに向けて、いくつかの区長にヒアリングをしている。
  - (茶屋) 自主防災会が立ち上がった。12/7 の山の神で周知しようとしていたが、区の準備が整わず断念した。
  - (勝田町) 新しい区長に変わったタイミングで役員会に同席させてもらうことになった。

③ 自治区加入促進支援

- 地問研作成の資料が2種類あることが分かった。「住民向けの資料」と「自治区向けの資料」。どちらかの資料を使い、新区長会で手元資料として配布・説明する。
- 配布時は1回配っているのでも「加入促進の手伝いをさせていただく」という趣旨が分かるようにうまく説明する。

- ④ 先進自治体研修の企画・運営
  - 日程確定（2/23）。内部で決裁をとり、周知に向けて動いていく。
  - 対象者をどうするかを検討する必要がある。
  
- ⑤ 玉城町地域つながり特命系の活動支援及び協働実施
  - 下外城田は2/7に何か企画を実施する予定。企画づくりは石丸氏がサポートに入ることになった。特命系のリーダーと石丸氏が意見交換しながら進めていく。
  
- ⑥ 地域コミュニティサポートデスクの設置運営
  - 実施回数3回（累計15回）、相談件数5件（累計15件）
  - 実人数は7～8人。
  
- ⑦ 地域コミュニティ活動の支援
  - （下外城田）ポッチャを実施。参加19人。年明けの会議で今後の活動を話し合う。
  - （有田）2/23獅子舞を実施する予定。今年度はそれで終了するが、来年度に向けて意見交換をした。舞手の意見を改めて聞く場をつくることになった。
  - 下外城田コミュニティスクールに関わるために明日教育委員会を町長と訪問予定。
  
- ⑧ 地域コミュニティ補助金の活用支援
  - 「70周年事業について」を参照
  
- ⑨ コミュニティ育成セミナーの開催
  - 講座実施に向けて日程を決めていく。2月の下旬～3月上旬。
  - 今活動する人をステップアップさせるのか、ゼロから掘り起こすのかなど目的を明確にする必要がある。
  - 生涯現役でもセミナーを実施しているので、そことのすり合わせも必要になる。「A I」が人気だった。ニーズが把握できているのかを見直す必要がある。
  
- ⑩ その他地域づくり活動の支援
  - 県事業「多様な人材が集う「賑わい」の維持・創出事業」に出席
  - 来年度に向けて予算を見積もる必要がある。

## 2. その他

### 「70周年事業について」

- 下記の3本柱で実施していく
  - た（誕生記念：町主催事業）
  - ま（まちの魅力発信：町〈各課・特命係〉主催事業）
  - き（協働の推進：住民主体事業）の3本柱で実施していく。

- 70周年記念事業の基本方針、70周年記念事業の補助金（1年限定）の要綱、70周年記念冠事業の要綱（補助は出さないが町が広報を手伝うもの）を作成した。
- 補助金を使った場合は自動的に冠事業となる。
- 懸念点は、10団体が30万（20万）を使うことができるか。
- まずは周知し、説明会をする場が必要。最後に報告会をして、1年だけで終わるのではなく次年度以降にもつなげたい。
- 70周年記念の部分は2階建ての2階と考える。次年度以降は2階部分がなくなるので、通常の補助金の見直しも平行して進める必要がある。3月に70周年記念事業の報告会をして、そこに通常の補助金を活用した団体も来てもらい、次年度以降も報告会をすることを定例化していく。
- 70周年記念の補助金を打ち出しながら、通常のものも予告していき、スムーズに切り替えできるようにする。
- 冠事業は例えばどんなものか。例えば、和菓子店が70周年記念どらやきをつくった場合は当てはまるのか。
  - 例えば70周年記念囲碁大会、70周年記念少年野球大会など。町が広報を手伝う場合もあるので、特定の営利活動を応援するイメージを持たれるものは難しい。
- 70周年の機運を高めていくためにフリー素材的に活用してもらおう。記念事業の数を増やしたい。
- 条件を付ける方が管理は楽になる。ロゴを付けたチラシをつくる、など。
- お茶1ケースをつけることなどはできないか。何かインセンティブがないとわざわざつけようとならないのでは。何かがつくことで第三者にも進めやすくなる。

(1) 地域支援マネージャー事業

① 小学校区別地域まちづくり会議について

- 第2回は当初は年度内に想定していたが、何のためにするのか目的を明確化してから実施する方向としたい
- 年度変わってからの実施の方を想定。
- ゴールを設定し、そこへ向けて内容を確定させていきたい。
- カルタは地元を知ることができ、制作に地元の人も巻き込むことができる。「玉城町版」の70周年記念のカルタを制作。できたカルタを持って、各小学校区でカルタ大会などの企画を目指したい。カルタのネタなどをまちづくり会議などで区長や住民に集まってもらい地元の伝統などの意見をいただく場としたい。
- まちづくり会議でも「地域とのつながり」「地元愛」のキーワードが出た。新旧の住民がつながる、多世代交流のためにカルタは手軽につながることができるツール。
- いずれポンチ絵などをつくり共有していきたい。
- 70周年記念事業は年度明けてから、玉城町版のカルタを軸にイベントをする。まちづくり会議や小学生を絡めていきたい。
- 秋頃に博覧会をする案はなく、年明けにカルタ大会をするということか？ カルタの話はサブストーリーであり、メインストーリーはメインで要るのではないか。カルタをメインに持ってきてよいのか。博覧会的なものを実施するのは既定路線では。カルタそのものは悪くないが、メインになり得るのか。玉城町の了解がとればよいが、もともとは住民主催行事ではなかったか。
- 住民主催の行事と絡めてのまちづくり会議なのでしっかりと整理、確認が必要。秋の博覧会をしないのであれば、その代案を考える必要がある。ロードマップを明確に示して確認し、その方向性を早急に決めることが必要。
- チェックリスト（やることリスト）を作成してほしい。まず1つめは「博覧会をどうするか」。企画を決めて課長に確認する。やらない方向で提案するなら代替案のポンチ絵（素案）が要る。早く動かないと時間が足りなくなる。
- 新区長になったところでまちづくり会議をする、という案はどうなったか。
  - ⇒ 住民主体のイベントの前段階として、まちづくり会議が実施する。住民主体のイベントが確定できていないので、その状態でまちづくり会議をするよりは住民主体のイベントが固まったうえでまちづくり会議を実施した方がよいと考えた。
- 方向性が決まったうえで、まちづくり会議で何を聞くのか？
  - ⇒ どういう話し合いをするか、内容までは考えられていない。
- 「しない」という話題は出ていないので、おそらく「やる方向」になる。来年度2回

するにしてもタイミングは前倒しできる。6・8月にまちづくり会議をして、その後で秋にイベントがくるという建付けにしては、実行委員会的にして秋に向かう、という見せ方にしていく方がよいのでは。「やる方向」で進めていった方がよい。

- まちづくり活動がブースを出す、というイベントはよいのでは。ワンズ、野点、スポーツの体験、ステージ、作品展（文化祭との調整は必要）など物産や商品の祭り（マルシェ）ではなく、市民の取り組みが見られる“町民の活動”の祭りにする。市民活動フェスティバルのようなイメージ。講演やパネルディスカッションがあってもよい。まちづくりの祭典を実施する。
- 11月の末に3人に来ていただいて「ゴールを見せてほしい」と言われているので中ぶらりんにはできない。
- まちづくり会議を年度内に実施することは難しい。ゴールがどこにあり、そこへ向かうためにこの時期にこれをする必要がある、というロードマップが必要になる。当初の予定から変える場合は、その理由の説明と計画（代替案）が必要になる。

## ② 集落の情報収集・点検

- 1/19に勝田町の役員会を見学。内容は、区の存続に向けて、区費の値上げ、組の再編、役員のなり手がいないことで自治区の解散も視野にいれるか、などの議論が出ていた。今後も連絡を取り、関わっていく。
- 他の区が区長や役員を決めるのにどうしているか、情報を集める必要性を感じた。
- 茶屋の区長からの相談を受けた。牧場拡大に伴う住民の理解について。（これから拡大される状況）町長は現地を視察し理解しているが、一部の住民の理解が得られない。区長は牧場と住民の板挟みになり、困っているのでは。新区長になり、さらに大変かもしれない。区長が孤独だと思うが、役場も入りにくい話題なので、第三者の地域支援マネージャーが時折気にかけて相談相手になってあげるとよさそう。相談業務については一旦終わったが、自主防災会の進め方で今後相談があるかもしれない。

## ③ 自治区加入促進支援

- リーフレットを修正（総務防災課がシール修正）し、修正版を配布している。
- 2/7の新区長会で地域支援マネージャーの持ち時間は10～15分の想定。内容は、安楽島の視察研修の案内と加入促進（地域問題研究所が制作したWord版の修正版の案内）について。時間があればまちづくり会議の報告も。一言でもいいので70周年の記念行事のことも入れられたら入れた方がよい。（こういうことは何回も伝えていかないと届かない）
- 資料（Word版）は新区長会で配布する前に役場内の決裁が必要。

## ④ 先進自治体研修の企画・運営

- 1月の広報、2月の区長会で告知する。他、区長回覧、防災ボランティア、下外城田まちづくり、庁舎内設置など（今後、区長会、地域ケア会議、元気ですたまき実行委員会、2/11社協40周年、logoチャットなど）
- 1/20時点の参加人数は8名。目標は20名。
- 2/7の区長会の反応が良くなかったときの対応策を考えておく必要がある。

- 視察先への依頼文などは必要ないか。  
⇒ 先方に必要かどうかの確認を取る。
- ⑤ 玉城町地域つながり特命系の活動支援及び協働実施
  - 下外城田の特命リーダーと意見交換（2/7の小学校企画について返事待ち）
  - イベント等の案がない場合は、カルタの提案を検討中。
  - 田丸は三重大と空き倉庫で企画中。
- ⑥ 地域コミュニティサポートデスクの設置運営
  - 9月から18回、件数：17件（前回までの実績）
  - 茶屋の相談（②参照）はサポートデスクの出張として考えてカウント
- ⑦ 地域コミュニティ活動の支援
  - 有田…文化祭で獅子舞披露（11月）。小学校3年生の地域学習で披露（1/27）。今後の活動をどうするかの意見交換を計画中。  
⇒ 役場からケーブルテレビ（たまきチャンネル）の取材の依頼をしていただく。プレスリリースも発信する。活動者のモチベーションを保つためにもメディアに掲載されること（褒められる、評価されること）は有効になる。
  - 下外城田…12/15 ボッチャイベント後ふり返しをして下外城田神社の神事へ。団体設立への意欲があるので、自立に向けて自走できるように支援していく。（団体設立へ会則、名簿作成）
  - 避難所運営ゲーム（HUG）を予定。
  - 下外城田コミュニティスクール協議メンバー加入依頼については、まだ動きなし。
  - 資料の中に今月と先月のことが一緒に入っていると、最新の動きや動きのある・なしがわかりにくい。各月の動きが表形式で分かるようになるとよい。
- ⑧ 地域コミュニティ補助金の活用支援
  - 審査会について。地域コミュニティ補助金について、70周年記念を掲げてベースはそのまましていく。まちづくり審議会をつくり、そこにTMK事業の研究会などを関わらせていけないか。
  - 次年度は70周年の要項を決めていただいている。それが固まればマネージャーが町内を回るときに宣伝、周知、アドバイスのなかで活用を促進していく。
  - 補助金の説明動画を公開して、コミュニティ育成セミナーの一本とカウントすることもできるのでは。
- ⑨ コミュニティ育成セミナーの開催
  - 2/25（月）19:00～ コミュニケーション講座
  - 2/28（木）19:00～ ファシリテーション講座
  - チラシができればInstagramに掲載する（小さくコツコツと）
  - セミナーはもともと4回する予定だった。残りは3月末に実施する予定。（イベント企画などの講座）
  - 3月末ではまだ補助金の情報が公開されていないので、補助金をテーマにした講座は難しいのでは。



⑩ その他地域づくり活動の支援

- 12/20【三重県】多様な人材が集う「賑わい」の維持・創出事業
- 県集落支援員研修 2/13,3/7

令和7年2月27日 9:30~11:30

(1) 地域支援マネージャー事業

① 小学校区別地域懇談会について（70周年イベントに向けて）

- 企画書を作成し、作成後実行委員会へ動いていく。
- 自治区も巻き込みながら実施できれば。例えば実行委員会から区にメニューを提示し、一緒にやらないかと提案する。去年の懇談会で「世代間交流」「新旧住民の交流」が課題にあがっていたのでその視点から提案していく。
- スケジュールについて。年内に住民主体イベントを打ち出し、それまでに自治区などにも働きかけていきたい。6月にメニュー提示し、夏休みに各地区でイベントを実施し、9月にふり返りをするイメージ。秋頃に町全体の大きなイベントを実施する予定。
  - 6月のまちづくり会議でメニューを提示し、区に持ち帰って協議して…とという流れを考えると、夏休みのイベント実施は難しいのではないかと。夏休みを狙うなら、6月ではなく5月頃に前倒しする必要があるそう。6月にメニューを提示して、9月に実施するのは実質難しい。
  - 早くするためには取り掛かりを早くしないといけない。足りないとやれなくなってしまう。べ切が12月と決まっている。
  - ふり返りのまちづくり会議は年内（12月まで）でなくても、年度内にしたらいいのでは。
  - 現在の予定の6月を前倒しし、9月を後ろ倒しするスケジュールがよいのでは。
  - メニューを提示する前にも70周年の事前予告をするなど、丁寧に進めていった方がよい。
  - 区長が区に持ち帰るときに簡単にできるようなメニューがあるとよい。（例：ゴミ拾いなど）実施内容について議論して検討する自治区には地域支援マネージャーがサポートにつく。
  - 「夏休みに実施」にこだわりすぎなくてもよいのでは。実施しやすい下地をつくるのが重要ではないか。
  - 人材育成プログラムだということを前面にだしながら、保険としてポッチャやカルタを自治区でやる案をもっておく。
  - 地域まちづくり会議の主体は区長会ではない。さまざまな人が地域づくりに関わるきっかけをつくるためのものだった。そこに立ち戻ることも大事では。
- 小学校区の必要性について。
  - 70周年記念をきっかけに合同地域づくりまちづくり会議にして100人集めるのはどうか。
  - 4地区で各地区20人しているので不可能ではない。一同に会する意義はある。何か起こりそうな雰囲気や機運が生まれる。大きいものにしていくことは70周年

にふさわしい。

➤ 補助金の活動報告などもすべてをひっくるめる。必ずしも小学校区別である必要性はない。

- 総合計画の見直しが7年度に開始する。それも意識していくとよいのでは。
- 今後のスケジュール案
  - 4月……「地域まちづくり会議①」予告
  - 5月……「地域まちづくり会議①」実施
  - 2月……「4地区合同未来を語る100人委員会②」実施  
(U50、補助金の報告会も兼ねる)
- 社協の行動計画と地域支援マネージャーとしてのすべきことに重なりがある。「社会教育」「福祉」「まちづくり」で同じことを話している。お互いをつなぐことが必要。
- 玉城町では地域ケア会議が力を持っている。しかしそこが背負うことはできない。高齢者福祉の団体。もう一層上が地域別懇談会。区長だけが集まってはいけない。
- 見た目はどのようなものになっても、一時的なイベントに終わらない(まちづくりに関心を持ってもらう)意図を持っていることが必要。

## ② 集落の情報収集・点検

- 大きな動きはない。
- (茶屋区) 相談があれば連絡をもらう。新区長とはまだ会っていない。もし堀江さんが新区長と会う機会があれば「牧場の件はどうなったか。もし困りごとがあれば石丸さんに相談できる」ということをそれとなく聞いて、伝えてもらう。
- (勝田町) 継続して随時相談対応をしている。1月の新役員会に同席した。今後も必要に応じて関わっていく。
- 現在のように相談のあるところに重点的に手をかけているかたちでよい。69自治区あるので全てに関わろうとすると膨大になる。一生懸命やろうとしている、手を伸ばしているところに手をかけていくことで、それが次第に町内に広まっていくとよい。

## ③ 自治区加入促進支援

- 2/7 区長会で加入促進資料(2種類/新住民向け、区長向け)を配布した。
- 町長からの意向で、田丸小学校周辺の「自治区に加入していない地域」の自治区結成に向けた話し合い支援を検討中。70周年記念事業を通じてアプローチしてはどうか。
  - アプローチには「入るきっかけ」が要る。過去に地問研がしたように「自治区を結成していない地域」へ向けたヒアリングという形で入ってはどうか。困りごとはないか。過去に3軒ヒアリングしているが、それから軒数も増えている。
  - 普段の生活には自治会に入っていなくても困らない。いきなり役場が来て「自治会を作りましょう」となっても自分が中心になって呼びかけるまでいかない。実際にするなら何か入りやすい入り口を作る必要がある。

## ④ 先進自治体研修の企画・運営

- 2/23 に安楽島視察(参加者11名)
- (感想) 町が全員顔見知りで関係性があるのは強みだと感じた。

- 来年度に向けて、先進地を調査しておく必要がある。年度初めに見通しを立てておく  
とよい。
- ⑤ 玉城町地域つながり特命系の活動支援及び協働実施
  - 年末に下外城田の特命係から相談を受けていた。2/7 に保護者懇談会でのイベント企  
画を想定していたが、実施がなくなったので支援までは至らなかった。
  - 現在、各地区の特命係に来年度の計画の提出を求めている。計画段階から石丸氏に関  
わってもらうことで自然にサポートができるのでは。
- ⑥ 地域コミュニティサポートデスクの設置運営
  - 9月から23回実施した。累計相談件数は19件。
  - 殿町サロンの方が相談にみえた。イベント時は人が集まるが、普段から来るようにし  
たいという内容。後日改めて連絡をいただくことになっている。
  - 回数などは見直していく必要がある。効果の高いところに注力するべき。年度変わり  
は見直ししやすいタイミングである。
- ⑦ 地域コミュニティ活動の支援
  - (有田) 1/27 に小学校3年生に向けて地域学習の授業を実施。中日新聞、行政チャン  
ネル、三重テレビなどに取材を受けた。3/2 に今後へ向けた会議を行う。舞手にも参  
加をしてもらう。
  - (下外城田) 新たな取り組みの案として、避難所運営ゲーム (HUG) を体験。少し  
難しい印象があり、他案を検討することになった。70周年でうまく何かとつながれば。
- ⑧ 地域コミュニティ補助金の活用支援
  - 内容が決まり次第、補助金の説明動画を作成予定。
  - 骨子は変えることはできるのか。現場の感覚から4分の3のハードルの高さが気にな  
っている。これまでは10分の9補助だったのに、なぜ4分の1に増えているのか。
    - ▶ 堀江さんを通さずに、石丸さんが直接尋ねるのがよいのでは。ただこれまで10分  
の10では実施していないので理由が要る。今から変更は難しいのではないか。
    - ▶ U50 が補助金を受けるのは筋に合っている。ただ4分の1をどこから補填する  
か。企業などから協賛を受けるなども一案としてある。
- ⑨ コミュニティ育成セミナーの開催
  - 下記の講座を進めている。
    - 2/25 (月) 19:00～ コミュニケーション講座 6/7人 (実施済)
    - 2/28 (金) 19:00～ ファシリテーション講座 7人
  - 2/25 は初めて来る人もいて、良い雰囲気だった。こういう講座で出会った人をうまく  
ネットワークしていけるとよい。
  - 来年度も同じ内容でもよいのではないか。(または同様の内容を年内に複数回してもよ  
い) 数年続けて
  - 以降は下記の講座を実施予定。チラシを広報で回覧済。今後広報も進めていく。
    - 3/25…写真講座 (町内Kデザインの河合さん)、3/28…企画講座 (石丸さん)
- ⑩ その他地域づくり活動の支援

- 3/4 三重テレビ（有田獅子舞）
- 3/1 認知症あるあるすごろく（認知症サポーターのフォローアップ研修）
- 3/7 県集落支援員研修

（2） その他

- 業務進捗リスト（エクセル）を過去の分も遡って埋めるとよい。年間の作業量がよくわかる。